

昭和 36 年 3 月

桜峠遺跡調査報告書

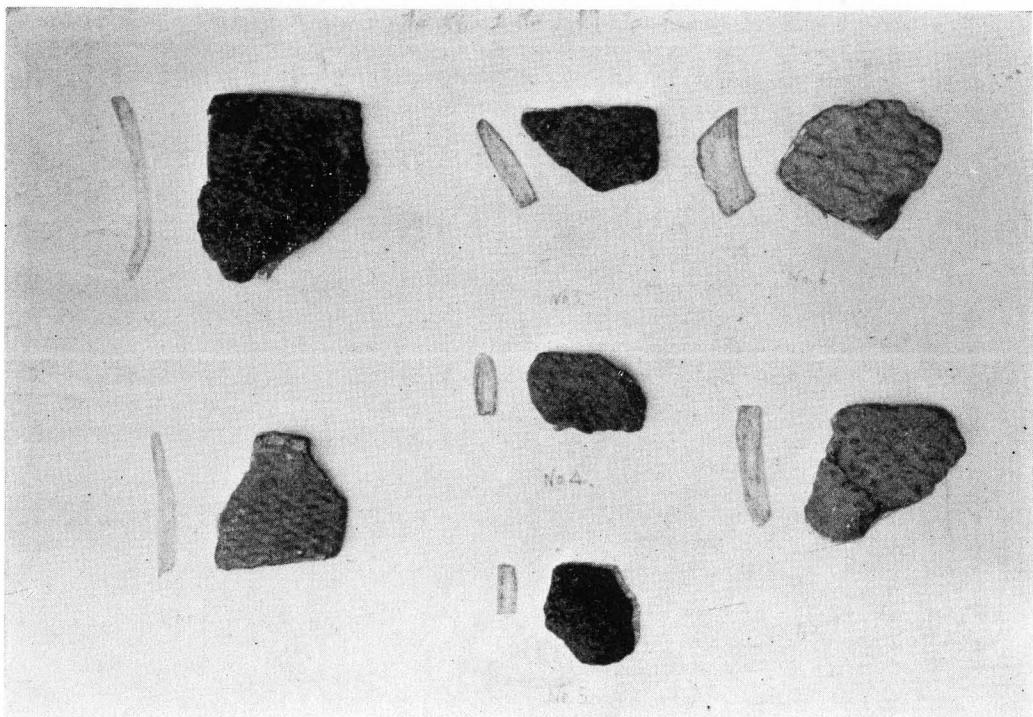
(上)

富山県教育委員会
魚津市教育委員会



図版 1

炉 址

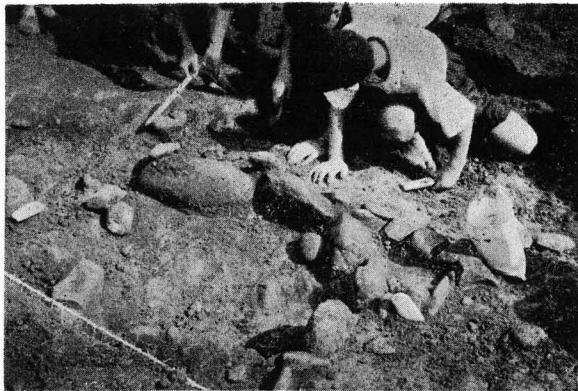


図版 2

押型文土器

炉址及び住居址

発掘状況



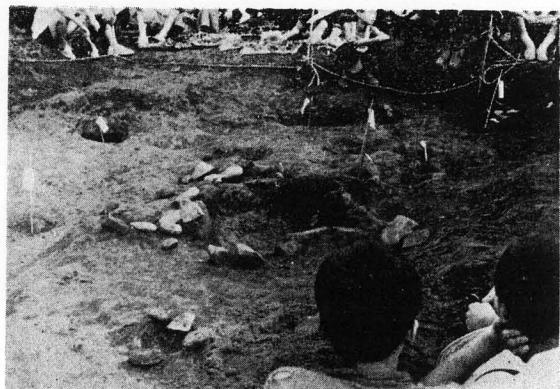
図版 3 炉 址
(西方より)



図版 4 炉 址
(北方より)

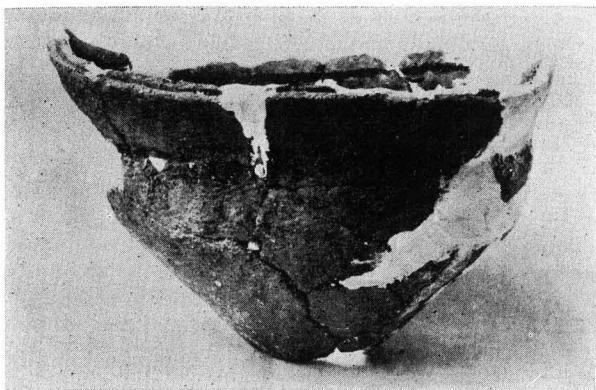


図版 5 炉 址
(南方より)

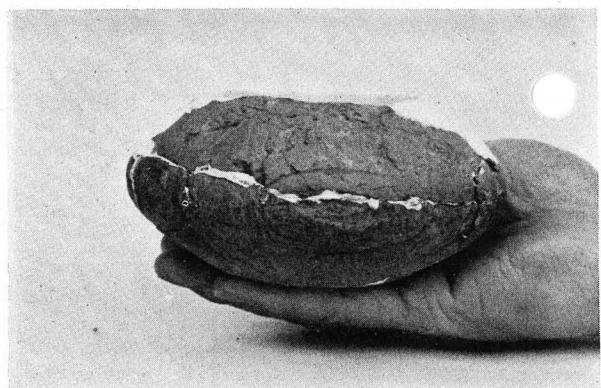


図版 6 住居址全景
(北方より)

主なる土器及び石器（其のI）



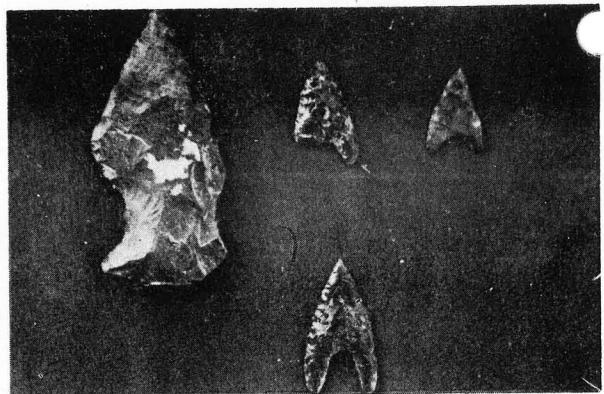
図版 7 土 器 (C地点出土)



図版 9 土 器 (C地点出土)



図版 8 同上土器出土状況



図版 10 石鏃及び石鎗

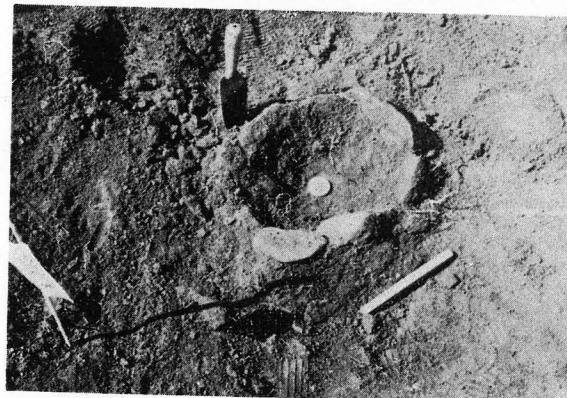
主なる土器及び石器（其のⅡ）



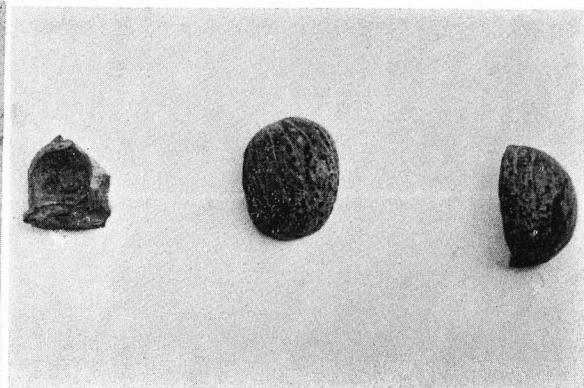
図版11 押型文土器出土状況



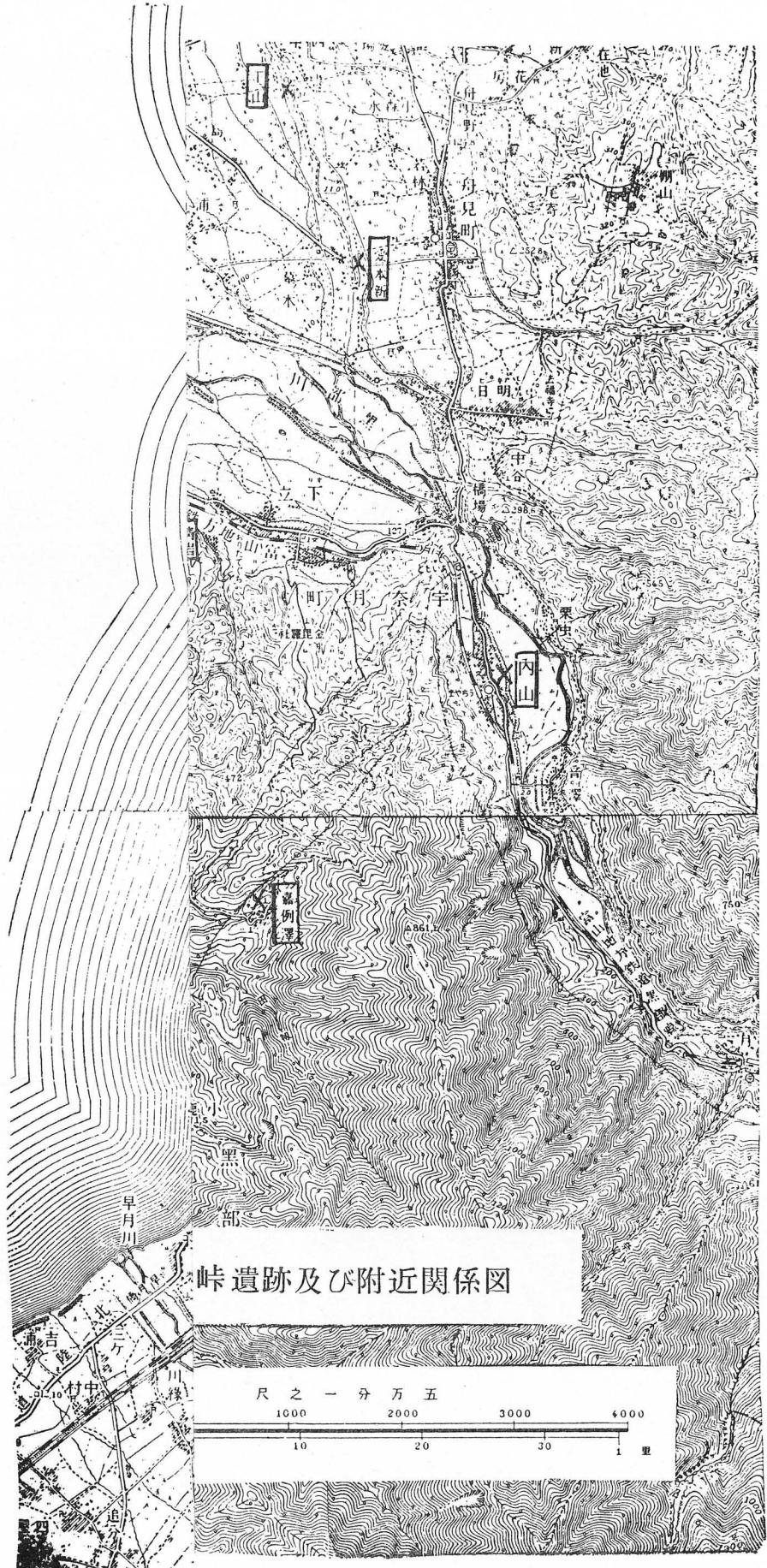
図版13 土器出土状況



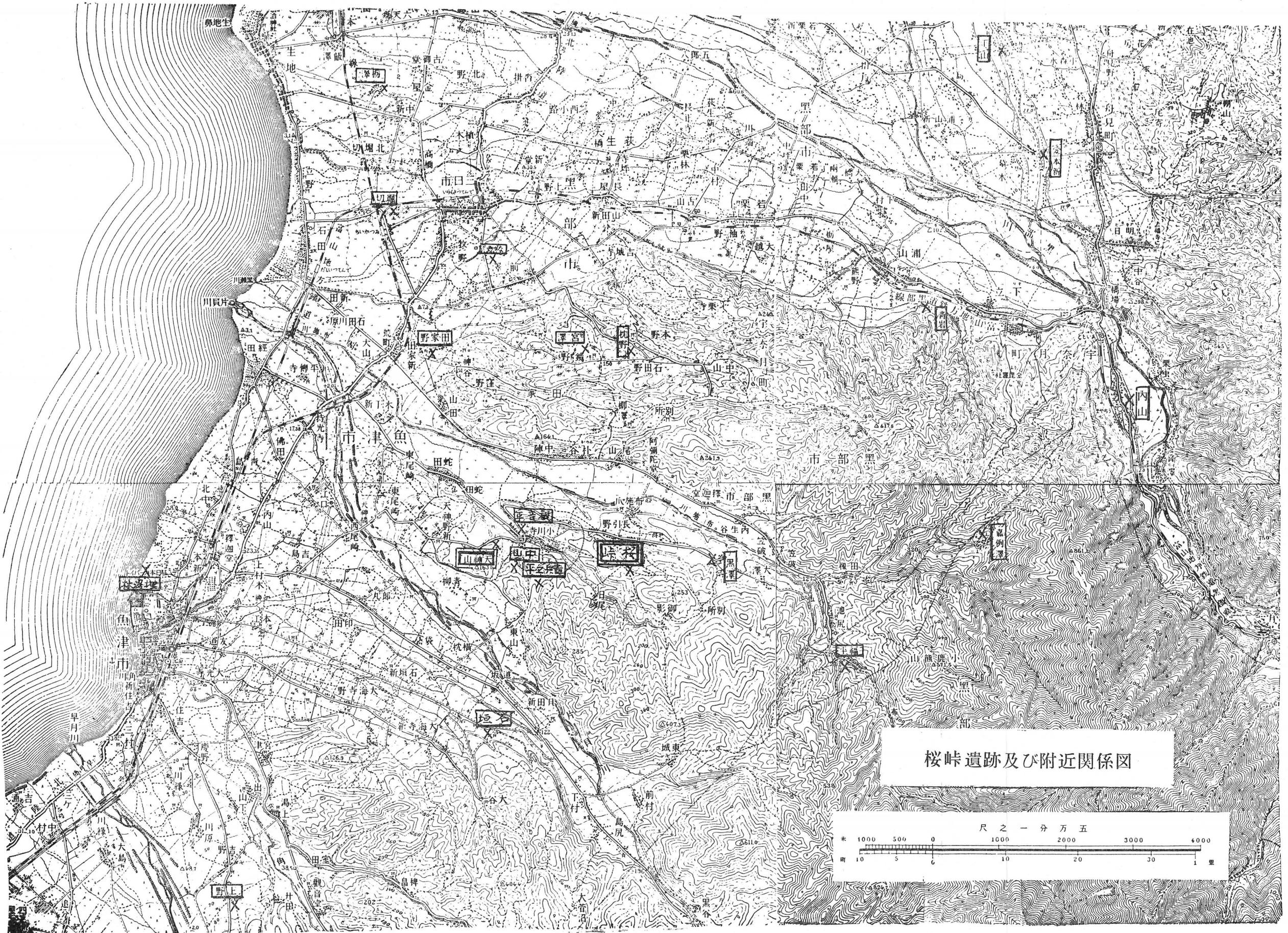
図版12 小炉址



図版14 自然遺物（くるみとならの実）



附 図



桜峠遺跡及び附近関係図

序

本県埋蔵文化財保存の必要上、さきに魚津市天神山の発掘をなし、学界に成果を発表した。

しかし、この周辺からは、同じ縄文式文化でも、時代を異にした種類のものが、多数出土している。

なかんずく、桜峠は、早期押型文（長円文）の発見を見ている貴重な遺跡であるが、近時次第に開発されて行くので、国立博物館考古学課長文化財保護専門委員八幡一郎博士を発掘指導講師として、魚津市教育委員会と共に、県考古学会等の後援を得て、昨年八月発掘を実施した。

結果、多くの成果を挙げたが、なかでも、本県では、今まで氷見市の朝日貝塚だけで発見されている「炉址」及び「住居址」が、完全に近い状態で、しかも、数か所から、発掘されたことは、注目に値する。

この報告書によつて、本県原始文化の様相が詳細に知られ、一般の关心を高めるばかりでなく、学界に益することが大きいと信ずる。

ここに調査及び、刊行に當つて絶大の協力を賜わつた、八幡一郎博士を始め、魚津市教育委員会、並びに、本県考古学会員の諸賢、県文化財調査委員早川莊作、魚津市大町小学校教頭広田寿三郎、小川寺光学坊の大谷清瑞の各氏、ほか関係各位に対し、厚く謝意を表すると共に、本書の広い活用と、文化財保護に一層の御協力を賜わることを希望し刊行の言葉とする。

昭和36年3月

富山県教育委員会

教育長職務代理者

安 井 信 一

序にかえて

桜峠天神山一帯の丘陵は呉羽丘陵、氷見丘陵と共に、県下で最も縄文時代の遺物の出土の多い地と聞いていた。その中でも、特に天神山桜峠の丘陵地帶は、縄文式文化の早期から中期晩期にいたるまで、数千年にわたつて人類が生活し、夥しい遺物を残しているが、その科学的な究明は、まだ十分ではなかつた。

これは本市にとつても残念なことであるのみならず、学界からも遺憾とされていて、先年富山県教育委員会、魚津市教育委員会が協力して、先づ中期の遺跡の天神山を発掘調査して、その報告書を刊行し、昨年は継続して早期の遺跡の桜峠を発掘し、ここにその報告書を世にあくる次第である。

幸に予期した通り縄文式早期の押型文土器を相当に発掘し、さらにその際、北陸では珍しい住居址を掘り当てたのは望外の喜びであつた。

特に今次発掘には考古学界の泰斗八幡一郎先生の御指導を得たことは幸であつた。また直接発掘の衝にあたつていただいた県考古学会の方々、特に早川莊作氏や、地元の大谷清瑞氏（光学坊住職）、広田寿三郎氏（大町小学校教諭）その他炎天に汗を流して戴いた魚津高校、東西両中学、布施中学の生徒諸君や先生方には誠に御苦労であつた。ここに深く感謝の意を表する。

なお、本報告書にあわせて天神山報告書をお読み下され、本県古代文化の究明に資せられると共に、今後も当地遺跡の研究が継続せられることを切望してやまない。

昭和36年3月末日

魚津市教育長 山本允彦

目 次

I 緒 言	1
II 遺跡の概観	2
III 調査の経過	3
IV 遺物の報告	9
A 自然遺物	9
B 石器	9
C 土器	10
D 住居址	16
V 結語	18
跋文	21
図版	
I 炉址及び住居址発掘状況	図版 3~6
II 主なる土器及び石器	7~14
III 石器	15~26
IV 土器	27~50
挿図	
I 桜峠遺跡及び附近関係図	附図 1
II 桜峠遺跡発掘地図	2~5
III 実測図	
A 石器	1~20
B 土器	1~37

I. 緒 言

先年、富山県教育委員会、魚津市教育委員会の共催で、魚津市の天神山遺跡を発掘し、繩文式中期の遺跡として、多大の成果をあげ、一昨年その報告書を刊行した。

桜峠の発掘はその時以来の宿願であつた。桜峠は、天神山とは、小谷一つ隔てた隣接の尾根であり、両者密接不可分の関係にあると共に、それは福光町の人母と共に、本県下に二箇所しか発見されていない繩文式早期押型文土器の出土地として知られている。先年、同志社大学酒誥教授や富山県考古学会湊晨氏のすすめもあり、天神山遺跡との関係に於て、桜峠遺跡の科学的価値を究明したいためであつた。

その熱望がいれられて、再び県教委、地教委の共催で、1960年8月23・24・25日の三日間、東京大学八幡一郎先生の指導のもとに、桜峠遺跡を調査発掘した。これには、地元の魚津市小川寺光学坊住職大谷清瑞氏の努力が大であつた。

従つて、本報告書は、天神山遺跡調査報告書と密接不可分の関係にあり、併読を希望する。
(魚津市小川寺、光学坊、天神山遺跡保存会蔵)

発掘調査は、富山県考古学会、魚津高等学校、魚津市東部中学校、魚津市西部中学校、黒部市布施中学校の教官及び歴史クラブ員によつて行われた。

又、本発掘に於ける出土品は、すべて、小川寺光学坊に保管されている。

II. 遺跡の概観

桜峠遺跡は、天神山遺跡の東方2糠の谷を隔てたゆるい丘陵地帯の鞍部にあつて、魚津市の中心部から約8糠東方にある（表紙写真参照）。正しい地籍は、魚津市（布施爪上野、212外5筆全1,215外2筆及小川寺熊ノ谷1,190ノ9）番地であり、出土散布地の面積は約3,000歩である。魚津駅から長引野行のバスに乗れば終点から徒歩約15分で、現地に達する。

地勢は富山県東部の峻峰毛勝嶽、僧が岳の峠続きが、うねうねと富山湾へ向けてゆるやかに流れ、最後に丘陵地帯となり、洪積層の舌状台地となつて、布施川（片貝川の支流）の平野に埋没する。その丘陵地帯の末端に程近い海拔150mの一小鞍部が今次発掘地点である。（附図I参照）

桜峠一帯は現在山畠である。その昔、附近に往来が通つていたといわれる。往時、越中路を横に継なく山街道があつた。この横（東西）の街道と縦（南北）に交る路線が桜峠附近であつたと伝えられている。布施川をさかのぼる一路線がこの近くで丘陵地帯の尾根へ登り、山街道に連つたらしい。桜峠という名称の由来は、この峠に大きな山桜があつて道行く人を楽しませていたからだと云われている。その桜もいつの頃か枯れてしまつて、今はその根だけが残つている。

今次発掘の桜峠に立つと、東方に僧が岳が慈母の如くゆつたりと控え、北方には布施川を隔てて布施の山々が屏風の如く続き、その中には、枕野の如く繩文式文化遺跡もあり、谷を隔てた西南方の天神山は代表的な繩文式中期遺跡であり、遠く西北又は西南の平野部には田家野、魚津埋林等の後期晩期の遺跡地も望まれる。さらに桜峠の山麓近く黒沢からも多量に繩文式文化の遺物が出土している。

其の他附近には数多の遺跡地があり、原始の採集経済時代には、恰好の生活の好適地であつたと思われる。

今次の桜峠遺跡の調査報告も、それ等との関係に於て論ぜねばならぬわけである。

さて遺跡地は赤褐色土壤のゆるやかな鞍部で、甘藷、煙草、外、いろいろの野菜が作られている。この地は後方に屏風のような丘を控えて、寒風をさえぎり、前はひろびろと、布施川の平野から富山湾まで一望の下に見下し、20~30m東方には豊かな清水が湧いていて、水と日光に恵まれた誠に生活上の好適地である。

この地は、表土は20~30cmでこの度の発掘により判明した遺物包含層は大体耕土下から最深部で80cmに及んでいる。出土品は早期の繩文式押型文土器から中期後期に及び、種類が多い。特に住居址の発見は価値あるものであつた。 詳細は後の記述にゆづる。

III. 調査の経過

1. 発掘まで

桜峠は縄文式土器の出土地として、天神山同様に、古くから紹介されていた。然し、縄文式早期土器の出土地として認められるようになつたのは早川莊作氏が氏の採集にかかる早期の押型文土器の一片を「越中史前文化」に発表され、これを八幡一郎先生によつて指摘されたことにはじまる。この押型文土器片は、富山の戦災に残念ながら焼失したけれども、この地から出土した石斧、石鎌等は、相当多く、早川氏は現在も所蔵して居られる。

ついで、1958年魚津市東部中学校西布施分校の高島清祐氏が同地に於て採集した土器片のうち富山県考古学会湊晨氏によつて、桜峠に早期押型文土器が存在することが再確認された。

ここに於て、その科学的光明が特に囁きされるに至つた。

そして、前記湊氏、早川氏の協力を得て、地元側の大谷清瑞（光学坊）広田寿三郎（大町小学校）が県教育委員会及び魚津市教育委員会へ足を運んで、遺跡発掘の主催方を陳情し、計画書、予算書を提出するに至つたのは1959年秋の事であつた。

1960年3月、県に於て発掘を決定し、指導講師として、東京大学講師八幡一郎先生を依頼し、文部省に文化財発掘調査を申請した。

翌4月、高島、広田の両氏が、現地を詳細に実地踏査して、発掘予定地を選定した。

6月29日、県教委から、野上係長、吉野主事、五十嵐主事、市教委から、山本社会教育課長、岡崎主事、県考古学会から湊、早川の両氏、地元から広田、大谷、高島が参加して、現地の再調査を行い、発掘予定地5ヶ所を繩張りした。同時に地主、耕作者に対する借地交渉を行つた。

2. 発掘経過

発掘は8月22日に準備をはじめ、23日から3日間行つた。参加者は指導講師として八幡一郎先生、県教委から野上氏、五十嵐氏、地教委から山本氏（教育長）山本氏（社教課長）、松倉氏、岡崎氏、県考古学会から湊氏、早川氏、林氏、栗山氏、田中氏、青江氏、石川県考古学会から高堀勝喜氏も参加した。

発掘個所は、5ヶ所で、（附図2参照）縦横夫々2m×6m（注、発掘途中延長した個所がある）。発掘地選定理由は且つて早期押型文土器を採取した地点及び現在、多量の遺物包含地である。

次に、発掘経過を記す。

8月22日（火）晴

午后、高島清祐氏が東部中学校西布施分校生徒を動員して、発掘準備をする。繩を張り直し、発掘地点の耕土（表土）を取り除く。この日早川氏来る。

8月23日（水）薄曇

発掘実施、市バス及びジープにて全員現地に到着、富大歴史クラブ員は前日から西布施小学校

に宿泊し参加した。畠平徳与先生引率のもと黒部市布施中学生も参加。

参加校、魚津高等学校、魚津市東部中学校、同西布施分校、魚津市西部中学校、黒部市布施中学校、以上の学校を次の通り配置する。

A地点……魚津市西部中学校

指導 岡田先生、雨池先生、石崎先生

記録係 藤井一二（富山大学）宮内美弥次（魚津高校）丸本清臣（魚津西部中学校）発掘者生徒20名

B地点……魚津市東部中学校

指導 菅野先生、谷口先生

記録係 奥井健一（富山大学）二塚直美（魚津高校）発掘者生徒10名

C地点……魚津高等学校歴史クラブ

高木秀実外14名（男8名、女7名）及び国学院大学生小島俊彰

魚津高校の歴史クラブは発掘経験もあり、特に指導者をおかないで、国学院大学の小島君の参加でそれをカバーした。

記録係 幾島俊彦（富山大学）上里洋子（魚津高校）

D地点……東部中学校西布施分校

指導 高島先生

記録係 清水毅（富山大学）杉原安伊子（魚津高校）発掘者生徒20名（但し女子生徒は連絡、中食時に於ける湯茶の接待にも協力）

E地点……黒部市布施中学校

指導 畠平先生

記録係 不明 発掘者生徒20名

上の配置を終り、一同東北側谷間の杉林に休憩場所をとる。この谷間に涌水がある。此処に休憩中、大谷氏より、桜峠の概念、特徴、発掘に関する注意がなされた。

指導の東大講師八幡一郎先生を早川先生魚津駅まで出迎えに行かれたが、連絡不充分でお会い出来なかつたとか、併し県教委から、野上係長、五十嵐主事、市教委から、山本教育長、山本社教課長、松倉、岡崎の両氏も早くから参加、県考古学会の湊氏、林、栗山の各氏の外石川県考古学会の高堀勝喜氏も参加される。

8月24日（木）薄曇 夕方から雨

八幡先生、富山へ直行、県庁を訪問しておられるために連絡が取られなかつたらしく、この日11時県財政課長、野上係長、吉野主事、同伴して光学坊に来着、中食後現地に向われる。夕方から雨になる。併しD地区から遂に待望の押型文土器7片を採集する。この夜八幡先生を囲み先生の歓迎会をかね懇談会を開く。魚津高校生も参加し、有意義な一夜を送る。

8月25日（木）晴

夜來の雨も晴れ、快よい発掘日よりである。宿泊の高校生は朝食もそこそこに出発、八幡先生一行も涼しい中にと早朝出発、C地区及びD地区に於ける発掘で更に20片程の押型文を採集、中

期との層の差も判明する。

E地点に於いて炉趾発見、住居趾も発見される。そして夕方迄に別記成果を得て、この発掘を一応完了した。

3. 発掘記録

今回の発掘地域は、東北と西南に谷を控える桜峠中、南北40m東西20mの範囲に於いて5地点を選定した。（附図2参照）東北側では、約5m下つた谷合に涌水があつて谷川をなしている。西南の谷は浅いが、やや西方下にくだると涌水が見られる。この西南の谷に添つて、御影部落へ通ずる林道があるが、これは御影から小学校への通学道路で観音平布施坂道と通ずるものであり、又畑への耕作道路でもある。

発掘箇所A、B、C、D 4地点は、縦の5mを東北、西南にとり、横（巾）の2mを東南、北西にとつた。E地点のみは東北の谷に添つて縦をとり、東北、西南に2mの巾をとつた。今後記録される採集地点の位置は、起点を、縦では東北から巾は東南からの距離と知つて頂きたい。深度は（耕土下から）マイナス記号を用いる。前の距離は縦、後は横 例200cm=100cm（縦200cm 横100cm）の意

A地点 記録係 藤井一二（富大文理学部文学科）宮内美弥次（魚津高校）丸本清臣（魚津西部中学校）

両谷のほぼ中間、東北側谷から約36mの位置であり5地点中一番高い。縦6m、巾2mを取る。

桜峠は全般に包含層が浅い。それは極めてゆるやかではあるが東から西へ流れる丘陵の脊に存在し、また東北、西南側の両谷へも傾斜するために、表土が雨の度に三方へ流れるからである。従つて、ふだんの農耕によつても遺物が鍬先に当り、あちこちに散在している。この地点では7～8cmで表土が取り除かれ、9cmあたりから遺物包含層となる。併しこれとても本格的な包含層とは云い難い。

記録によれば、縦550cmの位置に於いて深度-7cmで土器破片が採集されているがこれは本来のものとは考えられない。No.1（土^(土器の)）560cm=9.6cm・-18cm、No.2（土）79cm=17cm・-23cmであつて、以下深度のみについて云えば、No.3（土）-17cm、No.4（石^(石器の)）-15cm、No.5（土）-18cm、No.6（土）-15cm、No.7（？）-12cm、No.8（石）-18cm、No.9（ト石）-35cm、No.10（自石^(自然石の)）-28cm、No.11（土）-9cmと記録されている。土器ではNo.27-20cm、No.43.22cmの2点が記されている。これによると、No.11の-9cmが最も浅く、No.2の-23cmが最も深いことになっている。石器若しくは、自然石の埋蔵は一般に土器よりも深く、縦190cmの線では、横0～20cm及び180～190cmの位置で何れも-28cmに於いて数個の自然石が埋蔵していた。西南隅縦400=600の地点が、あたかも陥没したが如き感を与え、A地点の基盤（ほど-20cm）から更に、20cmばかりが黒色土に埋れていた。そして特にこの地点に於いて480=90-45の位置で石器らしきもの1点、450=120-50では、磨製石斧1点、520=140-57では砥石1点が出土し、その他ほどこの深度に於いて長さ

50cm 程度の細長い数個の自然石が発見された。この自然石の関係は或は B 地点に繞くものかとも予想されたが、未発掘であるから想像は記さないこととする。

B 地点 記録係 奥井健一（富山大学）二塙直美（魚津高校）

B 地点は A の西北 4 m の箇所で、A と同様縦 6 m、横 2 m であつて、後に西南へ 2 m を延長した。遺物は深度 -12cm 当りから採集が始まる。併しその深さから出るものはほとんど自然石の破片であつて、又僅かに加工の跡を示す石器片類である。今土器のみにつき、深さの順に随つて記述すれば次の通りである。-12 (435=15)、-13 (435=195) (注) 朱塗土器片-15 (560=150)、-16 (400=100)、-17 (400=120)、-18 (530=140)、(470=40)、(420=85)、(90=7)、-20 (40=145)、(330=20)、(540=60)、(580=120)、-21 (470=184)、-25 (570=135)、-42 (510=120) (以上何れも纏) に於いて各破片数片ずつが採集された。(各群は凡そ一類の土器の破片と思われるが原型に復原することが出来なかつた。) この地点で木の実の炭化物が-29 (495=23) -27 (552=20) -34 (580=24) に於いて各々 1 点ずつ採集された。ナラの実が 2 点、クルミの殻が 1 点である。石器類は-18~-30 の間に於いて採集され、珍らしい石器としては別図に示すように疑問石器（図版26）があつた。起点から 50~100 の位置を、基盤から更に深く発掘を試みたところ -50 (50=60) -65 (100=70) に於いて硬質の石片各 1 点ずつ採集したが、特に注目に値するものとも思われなかつた。西南へ 2 m の延長は、A 地点の西南隅との関連に於いてなされたもので、そこに埋蔵された自然石の散在工合は極めて暗示的であつた。

C 地点 記録係 幾島俊彦（富山大学）上里洋子（魚津高校）（附図 3 参照）

B 地点から北東へ 4 m、谷から 17.3m の位置に於いて縦 7 m、横 2 m を取る。魚津高校歴史クラブが担当、国学院大学生小島君、富山大学生幾島君も参加して信頼のおける発掘が行われた。この地点の出土品でほぼ完全に復原出来た土器が 2 点あつた。我々はこの地点の埋蔵状態を理解するために、特に縦 4 m、横 2 m の記録図を参考に説明を加えてみよう。（附図 3）

深さは耕土下より -28cm で赤色ローム層、No. 13 四石は -17 (113=17) で、この当りから遺物が次々散見する。-25 (113=28) では No. 28 土器片、-20 (118=39) No. 20 磨製石斧片、-20 (114=34) No. 21 磨製石斧。No. 25 自然石は -23 (147=50)、(-22~-23) の層に於いて焼土、木炭、木炭粉が図の示す通り見られた。-27 (120=230) に於いて 8 個の石によつて囲まれたあたかも炉の如き遺物を発見した。内部から焼土、木炭粉を発見し、われわれは、炉として保存することにした。（附図 3 参照）

この遺物から西南へ 50cm・-13 cm に於いて採集された土器は小型の平壺で、（図版 9）復原が出来たことは、深度 -13cm の位置としては珍しいことである。この土器は普通の中期遺物としては薄く内外面ともに朱を施してあつたらしいが整理中に薄れたことは残念である。No. 25 の自然石及び、No. 6 (-20) No. 31 (-13)、No. 59 (-20) (何れも自然石) が共に火に焼かれた跡が見うけられた。No. 33 の石斧は (-7) であつたから、本来の姿ではなく、耕作の途中掘りかえされてこの位置に埋蔵されていたものであろう。同様に、No. 46 (-9)、No. 32 (-3)、No. 30 (-5) の自然石もこの位置における自然状態とは考えられない。

我々は今少しくこの地点の埋蔵状態を知るためにその深度を追うて遺物を眺めて見よう。（-

12) No. 3 土器、No. 29 自然石、No. 42 石斧、No. 51 石斧、(−13) No. 2 自然石、No. 6 自然石、No. 10 自然石、No. 15 土器、No. 31 自然石、No. 35 石斧、No. 60 土器(復原)、(−14) No. 18 自然石、(−15) No. 1 土器、No. 61 木炭、(−16) No. 7 土器、No. 8 ?、No. 70 自然石、N. 74 石斧、(−17) No. 13 四石、No. 7 疑問遺物、No. 37 石斧、No. 50 土器、(−18) No. 19 自然石、No. 49 石斧、(−19) No. 53 磨製石斧、(−20) No. 4 土器、No. ? 原石、No. 20 磨製石斧片、No. 34 土器、No. 50 自然石、(−21) No. 57 石斧、No. 36 土器、(−22) No. 24 土器、No. 63 土器、No. 65 土器及木炭、No. 76 焼土、No. 80 自然石、(−23) No. 21 磨製石斧、No. 22 黒曜石片、No. 25 自然石、No. 47 自然石、No. 55 滑車型耳飾、No. 67 土器、(−24) No. 48 石斧、No. 52 土器、(−25) No. 27 土器、No. 28 土器、(−26) No. 38 ?、No. 79 石斧片、(−27) No. ? 土器、(−28) No. 54 自然石、No. 66 土器、No. 73 四石、No. 78 自然石、(−31) No. 44 木炭、(−25) ~ (−30) No. 26 木炭及土器片散在、(−32) No. 42 石斧、No. 45 ?、No. 69 自然石、(−34) No. 83 石斧、(−36) No. 82 自然石、(−38) No. 77 磨製石斧、No. 34 石斧、(−42) No. 81 自然石、(−43) No. 85 石斧 2 個及叩石、(−50) No. 40 土器、No. 39 土器、No. 72 土器、(−55) No. 62 土器(復原、繩文、鉄カブト型)、(図版 7. 8) (−50) No. 71 土器、(−75) No. 64 自然石、No. 75 磨製石斧片、(−80) No. 56 自然石。

C 地点西南 2 m の区間に於ける埋蔵が −40 cm を越えるところに注目したい。また C 地点遺物の中に押型文土器一片(焼成粗黒褐色、厚 1.3 cm、長円文 = 長径 0.8 cm 短径 0.4 cm)が発見され、更に上述の No. 62 土器の底部は欠けてはいるが、それは尖底に近い底部 4 cm 以下と想像される。ほぼ完形土器が出土している。(この土器は橢円形で、長径 23 cm、短径 20 cm、高さ 14 cm、底部欠、この欠部直径 4 cm。更に掘り上げられた土の中から石鏃 1 点が採集された。

D 地点……清水毅(富山大学) 杉原安伊子(魚津高校)

A から東北へ 3.6 m、C の東方約 6 m 谷から 6.5 m の位置に於いて縦 7 m、横 2 m を取つた。東方及東北谷側へ傾斜する箇所で、腐蝕土が厚く堆積していた。我々はこの地点から待望の押型文土器の破片を採集し得、そして土器に関する限り、中期土器と早期土器との間に 20 cm の深度差のあることを知つた。埋蔵物は −12 cm 当りから見られたが、果して本来の埋蔵物であるか、或は流入によるものか判定し難い。天神山式中期土器が発見されたのは −30 から −40 の間である。押型文の第 1 号が発見され、最も多く発掘されたのは −55 ~ −61 の間である。これら押型文土器の埋蔵位置は東北側から 128 cm までの間で、これ以西では発見されなかつた。それ故に、この位置を東方へトレンチするか、或いは、東北へ延長すべきであつたかも知れないが、今回は問題を後に残して、次の機会を期待することにした。押型文土器の採集は、前記 128 cm までの間、−55 に於いて 2 点、−58、1 点、−60、2 点、−61、1 点である。(詳細は別記、附図 5)

なお、−61 に於いて小形磨製石斧 1 点、−62 に於いて磨製石器 1 点、更にはぼこの位置に於いて黒曜石の石片 1 個を採集した。

E 地点……記録係不明

谷から 4.5 m、C から北々東約 9 m、谷添いに縦を 7 m、横 2 m の地点を E とした。この地点では後に 2 m を西南側へ延長、発掘を行つた。非常に多くの土器片と、石斧類が出土しているにも

かかわらず、記録のないのが残念である。これはこの地点の記録を担当したのが中学生であつたことにもよるのであろうが、炉址の発見に次いで、住居址へと追及されるに及んで幼い中学生達が期待に胸をはずませて発掘に熱中し、記録へまで手がのびなかつたのであろう。従つて此処では詳細な記述が出来ないが、炉址、住居址については別図を参考して頂きたい。

III. 遺物報告

A. 自然遺物

木の実の炭化物及び自然石

「B」地点から3点の木の実の炭化物が出土した。クルミの殻1点とナラの実2点である。非常に貴重な資料と云わねばならない。真黒に変色しているが形は明瞭に残している。形は橢円形で大きさは、ナラの実は2cm、2cmである。遺物としては以上の外、骨角等1点も見受けられなかつた。(図版14)

普通には存在する筈がない自然石が包含層中に相当多く、その人為的配置は確認されなかつたが、発掘の途中、いろいろと関心がもたれた。特に、A地点、B地点に意味あり気に配置された如き自然石が多かつた。自然石の大きさは天神山に比しやや小形であつた。長径約40cm～100cmの枕型、石質は花崗岩と砂岩が主であつた。然し、その配置、構造等を認められなかつたのは残念であつた。

B. 石器

a. 打製石斧

① 全面共打製のもの 天神山採集のものとほとんど変わらない。何れも短冊形であつて、天神山に見られた、ばち形は見受けられなかつた。石質は麥杆安山岩、安山岩質凝灰岩である。完全形7個(内訳)「A」地区1個、「D」地区2個、「E」地区4個、欠損したもの14個(内訳)「A」地区1個、「B」地区4個、「C」地区3個、「D」地区2個、「E」地区4個、以下地区的名称を略する。(図版15
(実測図1の1.2.3.4))

② 片面のみ打製、反面は自然のままのものと、磨いたものがある。(半打製石斧又は半磨製石斧) 完全形6個(内訳「A」1個、「C」4個、「E」1個) 欠損形20個(内訳「A」4個、「B」9個—内大型5個、「C」2個、「E」5個=中型4個・大型1個)(図版16.17
(実測図1の5.6.7.8))

b. 磨製石斧

天神山と同様短冊型が多い。所謂中型で10cm前後の大きさであることも同様である。4cmと云う小型の磨製石斧が1点D地点押型文土器と共に出土している。石質は緑色凝灰岩、蛇紋岩(飛騨变成岩類)等である。硬砂岩のもの1点あつた。完全形16個(内訳)「A」3個内小型1個、「B」2個、「C」2個、「D」2個内前述小型1個、「E」8個 欠損形3個(内訳「B」1個、「C」2個)。すり切石斧等はなかつた。(図版18.19.20
(実測図1.2の9～20))

c. 石鎌

桜峠ではこれまでにかなり多くの石鎌が採集されている。形も良く石質も天神山のものより硬く美しいものが多い。この度は完全なもの2個、欠けたもの1個を採集した。3個共無柄である。

石鎌 1. 完 A地点 石質、(低品位の、めのう)大きさ2cm

2. 欠 A地点 石質、薄紫色の水晶、大きさ2.5cm

3. 完 C地点 石質同上大きさ 3 cm (図版 10
実測図 3)

d. 石 槍 1 点

表面採集である。今度の発掘地の範囲外であるがやはり桜峠地内である。西南側の谷を越えたところにある畑から採集したものである。玉髓製であつて、大きさは 6.5cm である。

(図版 10
実測図 3)

e. 石 磬

自然石の長径の両端を打ち欠いて糸かけとしたもので、全長 5 cm 内外、天神山と同様一番容易に入手出来る遺物で、それだけに此処の住民の漁撈生活が伺われる。石質は麥朽安山岩が普通であるが、角閃石閃綠岩(大きさ 5 cm) 1 個採集した。数 6 個(内訳「B」2 個、「E」4 個)。一般に小型であつて、この度の発掘品は異例を示すものかどうか今後の調査にまちたい。

(図版 21
実測図 2)

f. 叩 石

数 17 個(内訳「A」1 個、「B」5 個、「C」7 個、「E」4 個)磨製叩石とでも名づければ適當なような石器が 2 点採集された。「C」1 点「E」1 点。(図版 22)

g. 凹 石

両面に一対の凹を有するもの。片面に 2 つの凹を有するもの合せて 4 点出土しているが、中 2 点は麥朽安山岩、他の 2 点は硬質砂岩であつて、砥石としても使用した痕が残つている。数 4 個(内訳「A」2 個、共に硬質砂岩、「C」1 個、「D」1 個)。(図版 23
実測図 2)

h. 砥 石

硬質砂岩の砥石で、産地は恐らく黒部市福平であろう。福平では今もこの石質の砥石を産しているし、桜峠とは山続きでもある。桜峠の道は、かつては黒沢、大沢、福平と通じていたはずである。13 個の砥石が出土している。

内訳「A」7 個、「C」1 個、「D」1 個、「E」4 個。(図版 24)

i. 不明石器及び石質

B 地点で採集した三角柱石器は一辺約 4.5cm、高 7.7cm の三角柱で胴部はほぼ 5.5cm にふくらんでいる。これは小形冠石であろう。その他粗悪なヒスイ原石 1 点、黒耀石片、石英片、水晶片等も出土している。(図版 26)

石質についてはその都度触れておいたが、産地の研究も極めて重要である。麥朽安山岩や安山岩質凝灰岩は福平附近に行けば布施川の崖に露頭しているから、桜峠を布施川川原へ下つて河床礫の中から採取したと考えられる。砥石については前述の通りである。角閃石は黒部川汀線に於いて見受けれるが、布施、片貝川原では見受けない。ヒスイ、黒耀石、水晶等は更に遠く新潟県の姫川あたりを予想しなければならない。(以上魚津高校富山先生の指導による)。

C. 土 器

桜峠の埋蔵状態は全般的に浅く、ために普段の農耕によつても鋤先にかかつて小破片となつており、更に風化が甚だしいために原型を推定するに足る復原土器の発掘は先ず不可能と云つて

よい。併し、此の度の発掘でC地点から完全体に復原したものが2個あつた。

その1個は前記の平壺である。これは中期には時おりある小型の平壺で、模様があれば頸部に帶状の隆起があり、内面、外面ともに朱をつけるのが普通である。今度のものも菱形の模様があり土器は薄手で、土質は精選されていた。勿論朱が施されていた。（図版9参照）

D地点に於て、かねて期待していた押型文土器の破片を採集した。28片で、点数にして11又は12点であらうか。C地点の土器破片の中にも押型文1片が交つていたが、これは如何程の深度にあつたものか不明である。D地点では-42に於て先づ1片発見されているが、総体としては-55から-60の深さに於て発見されている。即ちD地点では、約-30糎まで中期の土器が発見されている。この中期と早期の土器層の間に約20cmの差があり、これは無包含層で、暗褐色腐蝕土であり、上部の中期土器包含層とは特別な差異は見られない。然しその下の基盤に接した5~10cmの押型文土器出土層は黒色有機質土壤で肉眼でも区別される。（図版2附図5）

天神山でも、そうであつたが、桜峠でもA.B.C.E.何れも单層であつたが、Dのみは早期と中期の復層であつた。

この押型文土器出土層から、石器3点（前述）が出土している。（図版25）尚、C点の中心部基盤に接し頁岩の小原石が出土したことも注目された。

さて押型文土器片には、薄手と厚手の2種があり、薄手は器形は小型土器らしく口辺部が外反し、長円文の長径は4~5mmで焼成かたく、浅型尖底土器を想像させる。厚手は長円文の長径が6~8mmで焼成粗雑で色は茶褐色を呈し、質もろく、深型尖底土器を想像させる。出土状態に於ては薄手、厚手共に特別の知見はなかつた。..

桜峠で得られた土器は小破片であつたからその原形を推定することが出来るものは僅である。そして我々の発掘は、その中の僅の一小部分に過ぎなかつたから、十分な比較は困難であるが、天神山遺跡のもの程大きく豪快なものが少かつたが精緻な感覚の土器が多かつた。製作も天神山遺跡のものよりも精巧に思われる。

滑車型耳飾1点がC地点から採集された外、他の土製品は見られなかつた。また土偶の足かと思われる破片が1点あつた。

天神山遺跡発掘のさい発見されなかつた貝殻による疑似繩文や貝殻文土器が相当見られた。またその時期のものと思われる条線文も比較的多く、また朱塗土器も割合多く見られ何れも焼成度高く堅牢で精製品が多い。

土 器 分 類

1. 押型文土器

D地点28片、C地点1片採集

No.1 2片、表面黒褐色、内面褐色、口頭部である。厚4~5mm、口唇は円く口縁は外反している。長円文の大きさは長径5mm、短径2mm、口辺から全般に規則正しく、而も深く鮮明に押されている。長円文のつけ方は、鉛筆大の棒に米粒状の楕円の刻み、若しくは山形直線

をつけた棒を転がすことによつて凸形模様をつけたものである。口辺から 1.7cm 下つたところに直径 8 mm の穴が、非常に美しく掘られている。この穴は焼成後つくられた穴で外側一方よりえぐられ 内面での直径が 2.5mm である。(図版 29の8
(実測図3.押型文土器の1))

No. 2 1片、表面褐色、内面黒色、口頭部、厚 4 ~ 5 mm、口唇は円く、口唇に近い縁で口部が外反している。長円文の大きさは長径 5 mm、短径 2.5 mm、No. 1 土器よりも更に鮮明である。(図版 29の10
(実測図3.押型文土器の2))

No. 3 1片、表面黒褐色、内面橙色、口頭部、厚 6 ~ 7 mm 口唇はやゝ円味を帶びているが平、口縁は外反していると見るべきか? 長円文は薄れているが、長径 5 mm、短径 2 mm。
(図版 29の9
(実測図3.押型文土器の3))

No. 4 1片、表面黒褐色、内面黄土色、口頭部、厚 8 ~ 9 mm、長円文短径 3.5 ~ 4 mm、浅く不鮮明である。(実測図3.押型文土器の4)

No. 5 1片、表面黒褐色、内面褐色、厚さ 5 mm、長円文は長径 4 mm、短径 1.5 ~ 2 mm、浅いが比較的鮮明である。(実測図3.押型文土器の5)

No. 6 3片、表面黄土色、内面泥土色、胴部、厚 1.4 mm であつて、黄土色の部分は約 5 mm、泥土色の部分は 8 ~ 9 mm である。長円文は大きく長径 8 mm、短径 4 ~ 5 mm、粗雑である。
(実測図3.押型文土器の6)

No. 7 3片、表面、内面共黄土色と思われる。厚 7 mm、胴部、長円文の長径 4 ~ 5 mm、短径 3 ~ 3.5 mm、浅いが比較的鮮明。(実測図3.押型文土器の7)

No. 8 及び 9 10片、これを一つと見るべきか、それとも別と考えるべきか判明しない。両者とも内面は黄土色であるが、表面は前者はやや薄茶がかかつた黄土色であるのに対し、後者は泥土色である。併し、大きな破片などの場合、1片の中でこのような色の相異はままあることがある。而も両者とも長円文が磨滅していて判然としない。長径 6 mm 程度と推察される。厚は 8 ~ 9 mm である。(図版27の1より図版28の6まで)

No. 10 1片、これも前述の何れかに入るかも知れないが、判然としないので別に数える。割目によつて見れば、表面は褐色、内面は黄土色である。厚さ 9 mm、長円文の長径 6 mm、短径 3 mm。

No. 11 1片、表面褐色、内面白黄土色、厚さ 8 mm、磨滅甚だしく長円文は測り難い。

No. 12 1片、2.5 cm と云う小さい破片である。茶がかかつた黄色とでも云うべきか、長円文は 6 mm 位の円いもの、併し磨滅が甚だしく判然としない。厚さ 9 mm。

2. a 類土器(連続爪形文)

隆起帯の上を半截竹管を用いて、連続的に爪形を押したもの。天神山式 a 類土器と称する(天神山遺跡報告書参照)。この場合基線隆起帯の上に施文されたものを云うので、隆起線上の爪形文は取らない。隆起線は半截竹管による平行沈線によつて画かれるものであり、隆起帯は、紐帶をはりつけて作ったものである。この隆起帯が基線となる。口縁に添つて第一線におかれることもあり、隆起線を 1 乃至 2、3 線施して次に隆起帯をはりつけたもの等がある。施文は、このはりつけた紐帶が原体に密着するように押すことによつて生れたものであろう。口頭部では口縁に添つて施されるが、波形口辺の山から懸垂した隆起帯が胴部にいたつて S 字形に胴を取りまくと云

つたのが、この類の特徴である。そして半截竹管を用いて、このS字に添つて曲線を画けば、それが渦巻文となり、この渦巻と渦巻の空間を三角模様で埋め、下部にいたつて底部へ垂直の平行沈線が引かれる。

今度の発掘によつてこのa類で復原の出来るものは1点も得られず、且つ胴部も1点を除く外得られなかつた。この1点について見ると、口辺は波形と思われる。爪形文は第2線に施文され、この線がそのまま胴部に向かつて走つている。

口辺部に当るものが、27点、29片採集された。口縁がほとんど外傾していた。この外、口辺を欠く口頭部や、胴部破片30片程を採集した。(図版 30.31 実測図3の8.9。実測図4の10.11.12)

3. b 類 土 器 (擬連続爪形文)

天神山式b類土器、前述a類土器に於けると同様に基線隆起帶の上をヘラで以つて連続的に刻目を施して、爪形文と同じ効果を上げる施文法である。これには二法あつて、一つは、隆起帶を平に押して文をつけるもので、他は隆起帶の中央を背に八字形に押して文をつける方法である。この方にはほとんど爪形文と見分けのつかないものもあり、又八字形、山形の感じを受けるものもある。基線が口縁口頸を取りまき、胴部への基線が、口辺の山、又は把手から起こされるのも、^a類と同様であるが、a類の胴部ではS字形になつたものが、b類では渦巻のことが多く、又それぞれの山から発した基線が各々巧な間隔を取つて胴部から下部へと流れるものもある。

我々はb類に於いても復原可能の土器は1点も得られず又原型を推定し得る程の破片にも接しなかつた。

採集土器類は、口辺又は口頭部18片、胴部の渦巻乃至その一部10片、その他擬連続爪形文と見られる破片類10片である。(図版 32.33.34 実測図4の13. 14 実測図6の35)

4. c 類 土 器

天神山式c類土器は、隆起線の根元、又は二本の平行隆起線の間を根元に向つて、半截竹管や、ヘラで連続刺突して施文をしたものである。天神山でもそうであつたが、桜峠でも極めて少なく、A地点から出土した口頭部1点7片はかなり大きいものである。それは波形口辺であつて、口縁に添つて隆起線がめぐらされ、その隆起線の根元に半截竹管で連続刺突したものである。この分類中に入るのはこの外に10片採集されただけであつた。(図版 35 実測図4の15.16.17.18)

5. d 類 土 器

天神山式d類土器は沈刻文と呼びならわしている。天神山の場合隆起線間の溝に半截竹管の背又はヘラによつて爪形又は八の字形に連続文をつけてあつたが、桜峠では変つた施文が2点あつた。一は隆起線は全然なく、半截竹管の背で二列ずつの連続爪形文を約4mmの間隔をおいて二本走らせたものと、今一つは口頭部に於いて前者と同様手法を用いて2本の線を走らせたものである。更に隆起線の根元にc類土器と同じ手法で沈刻を施したものもあつた。(図版 36 実測図4の19.20)

6. e 類 土 器

天神山式e類土器、器面全体に半截竹管による平行沈線を走らせて隆起線文を施したものである。a、b類と同様基線隆起帶のあるものもあるが、全般的にはこの基線はよく自由奔放に施文されているものようである。

百数十片の破片をこの e 類に集めたのであるがこの中の幾片かは、a 類 b 類土器の一部であるかも知れない。渦巻文も割合多く見られた。口縁部29片あつたが、これで見ると形はかなり色々あるようである。口辺も波形、水平が予想される。複雑な把手を持つものもあるようである。

(図版 37
実測図5 の 21.22.23.24)

7. f 類 土 器

天神山 f 類土器で繩文を主とした土器である。

出土数臺が最も多い。何れも破片であつて原型は推定し難い。C 地点で採集、復元した鉄カブト型土器は磨滅していたが無節繩文かと思われる。(図版7.8) 既に詳しく述べておいたが底を欠くだけである。器形は橢円形であつて口辺の長径の両端が小さい山形になつている。無節、単節、複節繩文が何れもあるが、異節繩文が見受けられなかつた。撚糸文 1 片あるが、(図版46) 前期末の撚糸文であろうと思われる。なおこの破片は出土地点層位は不明であるのは残念であつた。口唇部の存する口辺を19点、口唇部を欠く口辺11点、他に胴部53点(63片)を一応整理して見た。洗つただけで未整理の破片が壱千片以上を数えることが出来るが、その他あまりにも小片であるが為に一応除いた物は恐らく数をもつて読むことは困難である。無節繩文の 1 点(6 片)はかなり大きく、中若しくは大形であろう。焼成度高く、堅牢で、表面は黒褐色で光沢があり、内面は褐色である。厚さ 1 cm である。(図版38.39.40)

全般としては、小中形が多いようである。そして小形のものは繩文も細く且つ美しい。口縁約 8 ~ 9 mm を磨消したもの、口頸全部を磨消したもの、口縁に添つて 1 又は 2 本の隆起線を廻らしたもの、半截竹管の平行沈線で繩文を消したもの、更にこの平行線の上に爪形文を押したものもある。

所謂串田新式にみられる磨消繩文もある。

8. g 無 文 土 器

g 類とは、無文土器である。

無文土器は、かめ又は浅鉢(盛皿)に多い。原型を推定するに足る破片に接しなかつたが、天神山遺物と照合して、凡そかめと浅鉢に区別することができた。そして粗製品はかめに多く、浅鉢は焼成度高く堅牢であつて、ピツチを塗り、更に朱を施したものもある。浅鉢も二通りあり、所謂皿型のもの(これは完全無文)と、口縁が盆のようになつているものとがあり、この口縁部には深い刻目の条線文が施されている。ピツチは内外共塗つたもの、内面だけ又は外面だけと言つたものがある。朱は何れの場合もこのピツチを塗つた方に施されるのが原則である。併しピツチを塗つてないものにも朱塗土器がある。

粗製土器に小形のお椀型の土器がある。「マリ」とでも云うべきであろうか。(破片 4 片) E 地点出土の黒色、朱塗浅鉢破片は内面から口唇まで朱が残されていて美しい。外に胴部破片等24点程。(図版 41)

9. h 類 土 器

土器の突帯部にアナグラ貝の貝殻によつて繩文のように施文してあつて、A 地点出土の薄青色薄手(5 ~ 6 mm) 土器片は、極めて美しい擬似繩文である。焼成度低く、軟かい。その他 b 類に

於けるヘラの代りに貝殻でもつて圧痕をつけたものが多い。何れも5～7mmの薄手で、厚いもので8mmである。(52片) 内外共黒色、口唇角、口縁無文、胴部との境に隆起線を廻らし、胴部にいたつて急に張つている土器の破片がある。この胴部に擬似繩文が施されているが、この土器の中の今一つの破片では、この繩文を適当に残してその他の面を磨消したものが見られる。そしてこの土器には内外面とも朱が施されている。(厚さ9mm) 之が所謂串田新式土器である。

(図版42.43.44
(実測図5の25.26.27)

10. i 類 土 器

天神山でも僅に見られたものに条線文の土器がある。桜峠では比較的多く、而もその文に極めて特色のあるものが出土しているので、それをi類とした。「C」地点から出土した小形の平壺型土器がそれである。(図版9
(実測図5の30)

上部に口を持つたやや厚味のある円盤型と云つた方が最も適當かと思われる。最も張つた所12cm、口6.5cm、底6.5cm、高さ6cm、厚さ4mm、黄褐色、朱塗、胴に長径5cm、短径3.5cmの線画の楕円5個が配せられ、この楕円と楕円の間(3.5cm)を一辺約4cmの菱形を、口辺から底部へかけて線画をする。この菱形と菱形の間に約5.5cmと3cmの矩形の空間が出来る。この空間を約4mm間隔に縦の線を引き、更にこの線を同じく4mm間隔に斜に切るとそこに又菱形が出来る。この菱形が桜峠の特色である。

以上の復元土器の外に数片の菱形文土器の破片が採集されている。何れも焼成度が高いようである。尙この菱形文とは別に条線又は条痕文も比較的多く見られた。(図版45
(実測図6の31.32)

11. j 雜

jと云う分類があるのでない。上述の何れも入れ難いからである。小片であるから、或は上述の物の一部分であるかも知れないが、それとは全く異つた種類のものがないでもない。それらは今後の発掘をまたねばならぬであらう。

12. k 類 土 器

これは気屋式土器(後期)で、汎線(模様)土器である。表面を平滑にし、汎線で、模様を書いてある。(図版47
(実測図6の33.34)

13. k 底 部

我々は、此の度の発掘によつて僅かに2点の復原土器を得ただけであつて、他はほとんど原型を推定し難いので、それをカバーする意味で、底部に特に关心を持つてこれらを採集し、72点を得た。この場合も底だけの破片が多く個体の下部へ連るものが僅であつた。それらは全く参考図によつて知られたい。底で一番大きいものが約20cm、小さいものでは4cm前後のもの3点、7～8cmのものが最も多い。糸切底の破片1点、浅鉢底3点、あげ底4点、1点は高杯、他の3点は極めて特徴のあるものである。座痕のあるもの4点、簾、網代状の外に撚糸文かと思われるもの1点がある。(図版49.50.48
(実測図6の36.37)

14. 滑車型耳飾

土製品として外に滑車型耳飾1個があつた。

直径3cm、厚さ1.6cm、孔の直径1.8cm、褐色糸巻型耳飾。(図版48)

D. 住居址

住居址の発見は北陸では数少ない。こんどのものは住居址の基盤上から多数の縄文式中期の土器石器が出土しており、特に2、3の石斧が炉の構成の一部をなしていることから住居址もその時代のものと思われる。崖の端近くE地区から発見された。図版1.3.4.5.6及び附図4は包含土壌を取り去つた基盤を示している。基盤は赤色ローム状土、住居址の形はほぼ楕円形で長径は南北に約6m、短径は東西に約5mである。その位置は図の柱の穴P₁P₂…P₈の8個の穴によつて大凡想像される。その中主柱はP₁P₂P₃P₄P₈の5個の柱穴で深さは約40cm前後であるが、詳細は図によつて知られたい。また支柱穴らしき穴が住居址の内部に集中している。但南方と北方の附図4の中の?₁?₂印の場所は発掘未了のため不明であるが、其処には柱穴・溝等の所在が予想される。

入口は住居址の形、炉の位置、当時の生活状態及び当地の南西季節風の状態から考えて、楕円の長軸にあたる北方と考える。つまり炉址の一部分の空いている方向である。

住居址の床面は、奥の方、つまり南にやや高く、入口の方つまり北方にやや低い平面であり踏みかためられている。但小凹凸はある。元来この地は南に小高く、北に低い丘陵地であるからそれが自然かも知れない。西南の方向に図示の如き側溝がある。これは季節風の方向であると共に、やや高いため雨水の侵入する部分でもある。南及び北の?₁?₂の部分は未掘のため不明である。

床面上には当時の生活用具である各種の土器及び磨製打製石斧、叩石、凹石、砥石及び自然石が多数散乱していた。

炉址はほぼ方形で対角線が100cm×85cmあり、9個の大天然石と数個の小天然石に囲まれ、西北の角にはそれらしい配置がなく空いた形になつていて。炉を囲む石の内側は赤黒く焼け又は熱のためハク離したり割れたりしている。炉の内面は掘りくぼめ真赤の焼土となり、中に灰、木炭が多い。

炉に密着して東隅に小自然石に囲まれた22cm×24cmの小炉がありその周囲に石斧が数個あつた。炉の周囲にも焼土の塊、灰、炭等が多かつた。

住居址を蓋う包含土壌は黒色ローム土壤だがその中に縄文式中期の土器が非常に多く混在していた。特に奥の方つまり南方及び東南方向に多かつた。但し図には省略した。

この住居址から東方20m～30mにして清らかな湧水が流れ四時絶えない。住居址から湧水までの高度差は約5mに過ぎない。

まことにこの住居址は、背に丘陵を背負うて寒風をさえぎり、暖い日光に恵まれ、清らかな湧水が傍を流れ、木の実、草の根、鳥獸、魚貝に恵まれた原始人のよき居住地であつたらしい。さらにこの地は台地上の小鞍部の眺望絶佳の地である。

この住居址の周囲には外にも相当数の住居址の所在が予想される。

然し、住居址は調査未了のため堅穴か否かは明瞭にすることが出来なかつた。

外にC地区から小炉らしきものが発掘された。図版12附図3の如く長径39cm、短径34cm 8個の自然石で造られ、深さは炉面より17cmあつた。周囲に炉を囲んで自然石が散在していた。

炉と自然石との距離は石に腰を下して炉で暖をとるのに適した程度である。小炉の周囲に縄文中期の土器磨製石斧、炭、焼土、四石等散乱していた。

住居址の存在を確かめようとして柱穴、溝、側壁等を探したけれども炉面は基盤上ではなく包含層（灰黒色ローム状土）の中位にあり、ふみかためた形跡を確かめることも出来ず探索は不能であつた。炉の下層は時間なく発掘を中止した。

V. 結語

桜峠遺跡は好事家の間では、せん細華麗な小形石器が出土することで知られていた。事実、此度の発掘調査では見られなかつたが、黒耀石、水晶、めのう、鉄石英、オパール等黒、白、赤、透明など多彩な小形石鎌類が出土していて、蒐集家の所蔵品を輝かしいものにしている。然し、土器に関しては永く特別な関心がもたれなかつたが、最初にこれについて指摘されたのは八幡一郎氏である。

八幡一郎氏は早川莊作氏著「越中史前文化」を仔細に検討せられた結果、その図集の中の桜峠遺跡出土の小破片に注目された。即ち、押型文土器である。かくして桜峠遺跡は富山県としては繩文式早期文化の最初の遺跡として名のりを挙げた訳である。周知の如く、八幡一郎氏は富山県の考古学には深い関心をもたれ、早川莊作氏著「越中石器時代民族遺跡遺物」（大正15年）を広く世に紹介されるなど、爾来40年に亘り斯学の指導を賜つている次第である。^{註(1)}

斯くて八幡一郎氏は中部地方の考古学上の編年を試みた際、桜峠遺跡は中部地方では数少ない繩文式早期文化の遺跡として世に紹介され、位置付けされ、桜峠遺跡の価値を決定された。^{註(2)}

然し、早川莊作氏所蔵になる繩文式早期文化の土器破片は前述の如く富山市の戦災にかかり、滅失し、「越中史前文化」の写真のみが資料として残ることとなつた。

1958年、魚津市天神山遺跡の発掘調査が行われた際、天神山遺跡周辺の資料の調査も併せ行わ註(3)れた。時しも高島清祐氏の採集した資料のうちに桜峠遺跡の出土土器破片がこの押型文土器であることを筆者の一人湊晨氏に指摘された。そしてこの押型文土器の採集地点も確認されるところから押型文土器文化の解明が約束されたのである。

今回の発掘調査は如上の経過をもとに、主として繩文式早期文化の資料の採集と、主体をなす中期文化とのつながりを探ることにあつた。

結果は29片の押型文土器とその出土状況が明瞭に出来て相当の効果をあげたが、望外な収穫として住居跡を発見し、従来、追跡出来なかつた堅穴遺構の組織的調査も出来た。勿論発掘の前後を通して、表面採集した資料により予想していた通り、桜峠遺跡の主体は繩文式中期文化の所産であり、層位的に一局部に早期文化の資料を発見出来たことから、狭い早期文化の遺跡の上に広く中期文化の遺跡がかぶさつて形づくられていると申してよいであろう。

尙、中期の文化と申せば西北2糠の天神山遺跡の文化と対比しなければならない。天神山遺跡は中期文化の中頃の割合単純な遺跡であるが、その点桜峠遺跡も大体同時期のものと比定してよいであろう。たゞ手にとつた感じでは同じ模様であつても、桜峠遺跡の土器は天神山遺跡のそれと比べて稍薄手でひ弱い感じがする。

以上今回の発掘の経過を大観したが、之れを要約すれば次の二つにまとめることが出来る。

I. 繩文式早期土器の出土。遺跡の一局所に限定され、天神山式期の遺跡の下層から出土している。

II. 住居址の発見。炉の状況、周溝の状況から中期の住居址と考えられる。さらに中期の頃のものであると断定し得る石器等が住居跡から伴出している。

さらに今回の発掘調査の結果をとりまとめ要約してみたい。

1. 桜峠遺跡は布施川添いに長く伸びた舌状台地の一小鞍部にあり、海拔 150 m、出土面積は約3000歩に及ぶ。

2. 上層からは繩文式中期文化の天神山式土器を主体とした土器石器が多数出土し（耕土下35cm程度まで）下層から早期押型文土器が出土した。（耕土下55cm程度）その間の層位的関係は完全に隔絶していて、文化の流れは継続がなかつたことはたしかである。

3. 発掘状況からみて遺物の包含層は各地点毎に異なつてゐた。一番深い所で60cm、浅い所で20cmで基盤となつてゐる。

4. 押型文土器の出土地点は主な台地と支台地との間の微谷にあり、東北になだれた傾斜地にある。遺跡の中で最も水を得るに便利な地点である。

5. 自然遺物は自然石と植物の種子である。自然石は50cmから100cmに及ぶ枕状の石で、遺跡地内には普通に存在し得ないものである。従つて搬送したことが考えられる自然石である。

亦、その自然石は包含層の各点から不自然な形で出土していた。

植物遺物としては炭化した、ならの実とくるみの殻が出土した。

6. 石斧は打製磨製半磨製共によく似た比率で出土し、何れも中型の短冊型、断面は□型で、大きさは10厘内外、頭と刃との大きさは大体同じ。石質は蛇紋岩、緑色凝灰岩、変朽安山岩等である。

7. 石鏃は今回は少かつたが水晶の美麗なものが出土した。砥石は割合多かつたが、中には砥石を利用した凹石もあつた。

8. 住居址について。炉址が2ヶ所に発見された。小さな方の炉址は炉址のみで、附近を追跡したが他に住居址に關係した資料は得られなかつた。

大きな炉趾のある方は、8つの柱穴に囲まれ、6m×5mの長径短径の楕円形、床は踏み固められてあつた。その床は東北側に添うて多少傾斜していた。床の上には焼土、木炭、石器、土器等が散乱していた。西南隅に測溝があり、深度は割合浅い。周溝として追跡するには未だ全域の調査は終つていないが、全周を囲う周溝と断定出来ない節がある。

中央の炉址は矩形をなし、100cm×85cm、長径は南北で、9個の石で囲まれていた。堅穴かどうか、全域の調査をまつて判明すべきであろう。尙炉の東北隅に小石を以て副らしき遺構がみられた。その附近は特に中期文化の土器石器が多く散乱していた。

9. 土器について。先年発掘調査した天神山遺跡の土器、即ち天神山式土器が主体をなす。唯、器形は一般に小形であり、模様も天神山遺跡のそれに比して華麗雄大さは乏しく又完形品も少なかつた。

僅かな早期文化の押型文土器、たゞ一点丈であるが前期末文化の撚糸文の土器、主体をなす天神山式土器のa類、b類土器など、その他に串田新式土器も見られるが、後期文化の土器である氣屋式の様式をもつ土器も4点見られた。

10. 押型文土器はD地点耕土下55cmより60cmの間で出土し、その上に約20cmのローム状土壤を隔てゝ天神山式土器出土層があつた。押型文土器出土層は他の地点では確認出来なかつた。

11. 押型文土器は29片、同一個体と思われるものもあるが、大別して精製土器と粗製土器がある。精製土器は焼成硬く、厚さ4~5mm、長円文が鮮明に規則正しく押され、その長径5mm、短径2mmである。粗製土器は焼成粗く、もろく、厚さ8~10mm、長円文が不鮮明で、その押し方も割一ではない。その長径8mm、短径4mmである。

土器の色はいずれも褐色、黒褐色で一部黄褐色のものがあるが、一般に暗く、之れは土壤から着色した故かも知れない。

12. 押型文土器は口縁部等からみて、他の押型文土器一般の器形と異なることのないようである。

13. 押型文土器出土層中よりは長円文の土器のみ出土し、その他の押型文は見られなかつた。亦、繩文その他の模様のある土器も見られなかつた。

14. 押型文土器には、中期後期の土器に見られる様に雲母、石英砂を混入しているが、その混入の度合は多い。

15. 押型文土器と伴出した石器並びに石片は3点であつた。加工したものは2点、うち1は小形石斧である。

桜峠遺跡の押型文土器と附近出土押型文土器との比較は筆者等の知見の浅さを以てしては、到底及び得ない作業である。従つて、茲では忠実な出土状況の報告にとどめておきたい。たゞ、富山県内では他に福光町人母遺跡から4片の出土例が報告されている。桜峠遺跡と人母遺跡が押型文土器出土の繩文式早期文化の遺跡であることは明らかである。

人母遺跡の押型文土器は表面採集により採取されたもので、桜峠遺跡のそれと比較して所謂後者の焼成度粗雑でもろく、長円文があらく8~10mmのものに比定出来るものである。

但し、焼成度は割合堅固であることは桜峠遺跡のそれと異つている。何れにしても桜峠遺跡の押型文土器は2種に分類出来るが、人母遺跡のそれは1種のみである。

(以上)

註(1) 八幡一郎氏、早川莊作著「越中石器時代遺跡遺物」人類学雑誌42ノ120(昭2)

註(2) 八幡一郎氏「日本民族」中より

註(3) 魚津市天神山遺跡発掘調査報告

跋文

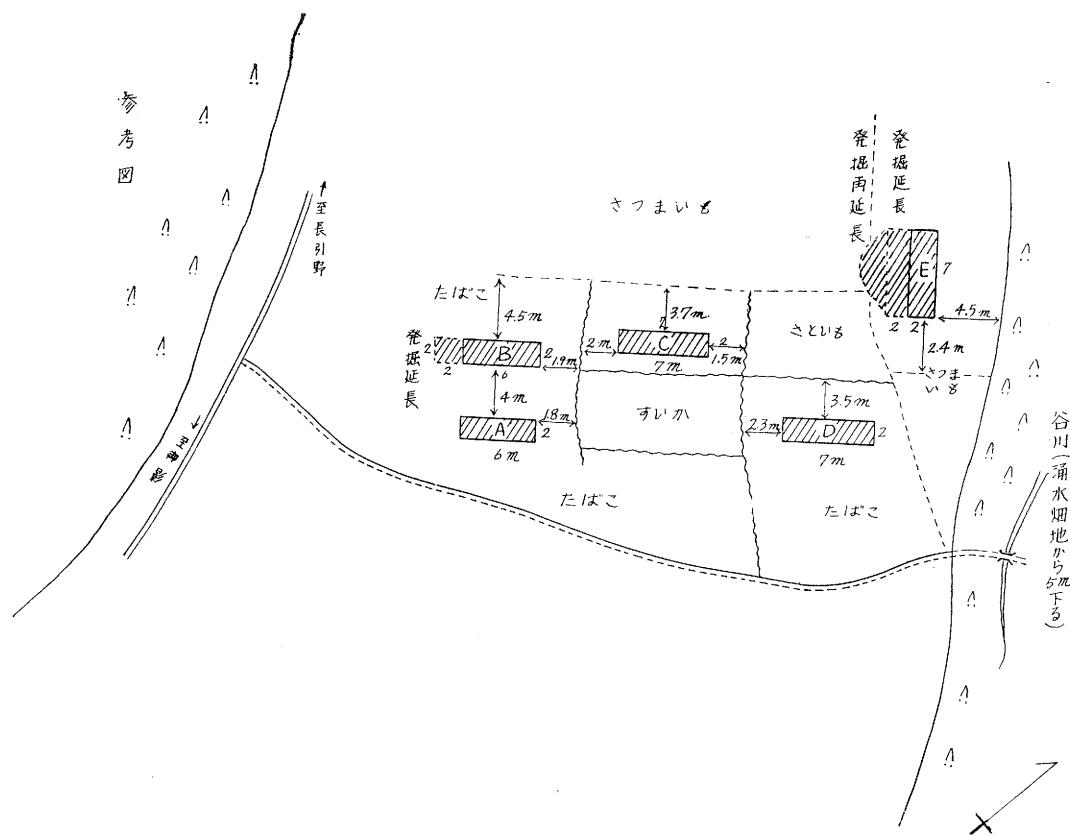
桜峠遺跡は昨年の夏の調査に立会つた私には極めて重要な遺跡であると思われた。と云うのは昭和の初め早川莊作氏がこゝから採集した一片の捺型文土器を示されて以来、一度実地を踏み、できれば発掘もしたいと永年念じてきた遺跡であるだけに、富山県及び魚津市の教育委員会の手で発掘調査されるに至つたよろこびが大きかつたが、それにもまして戦災で失われた一片の捺型文土器と全く同類のものを含む文化層を探り当て、その文化層が繩文式中期文化層の下に隠れておつたことが明かにされたからである。両教育委員会当局並びに調査に携わつた諸氏の労苦が見事に報いられ、その目的の一部が達せられたわけである。

今春広田寿三郎氏から報告書の原案を示されたが、身辺多事のためそれに対し充分卑見を加える暇がないまゝに今日に至つた。しかし調査員諸氏の努力によつて本遺跡の全貌は明かにされ、本県のみならず北陸地方の考古学研究に一つの指標が与えられたものと確信する。たゞ可能なれば、重ねて調査を行ない、繩文式文化早期の内容を明確にするとともに同中期の住居址の実態をより闡明にされることを希望する。これは隕を得て蜀を望む類かも知れないが。

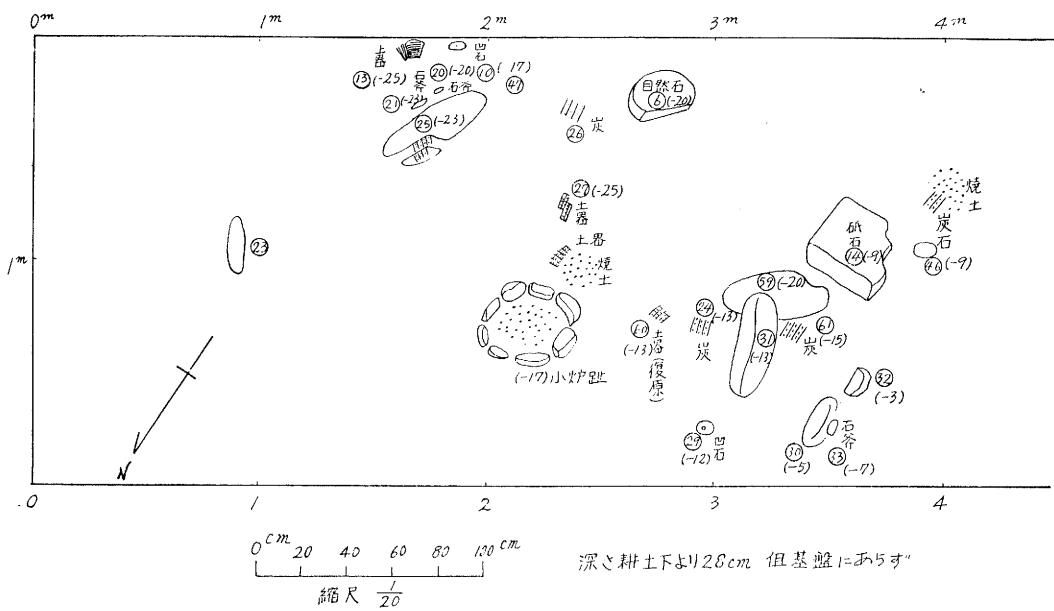
昭和36年3月

八幡一郎

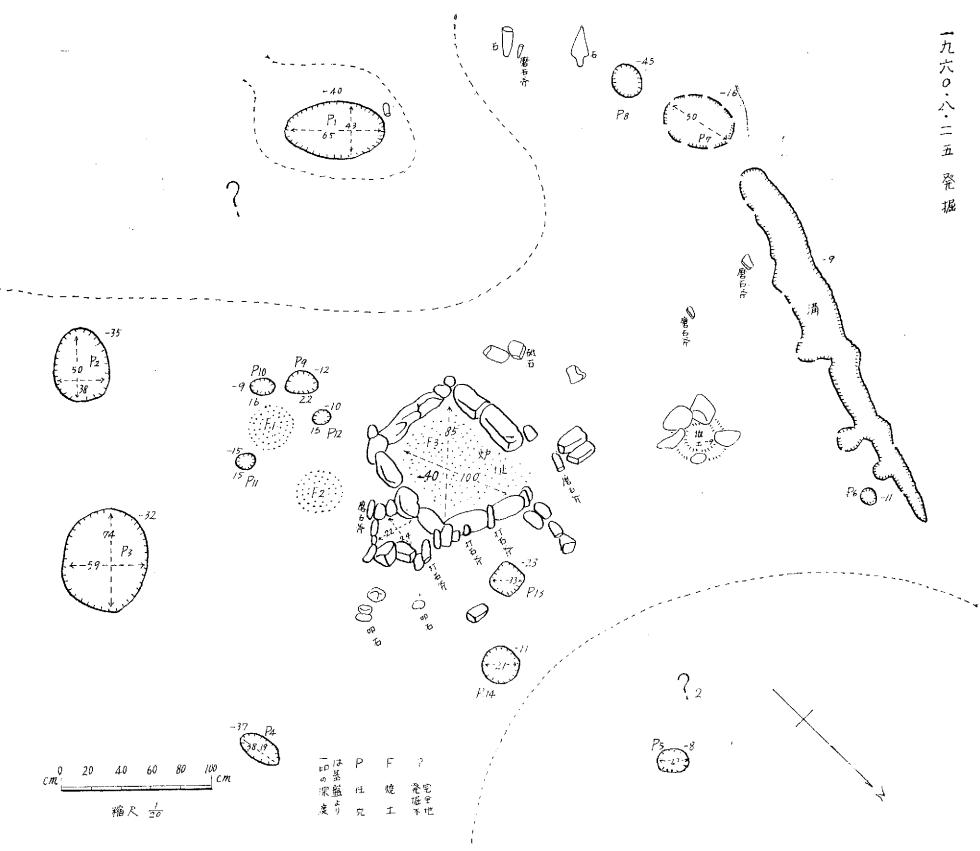
桜峠遺跡発掘地図



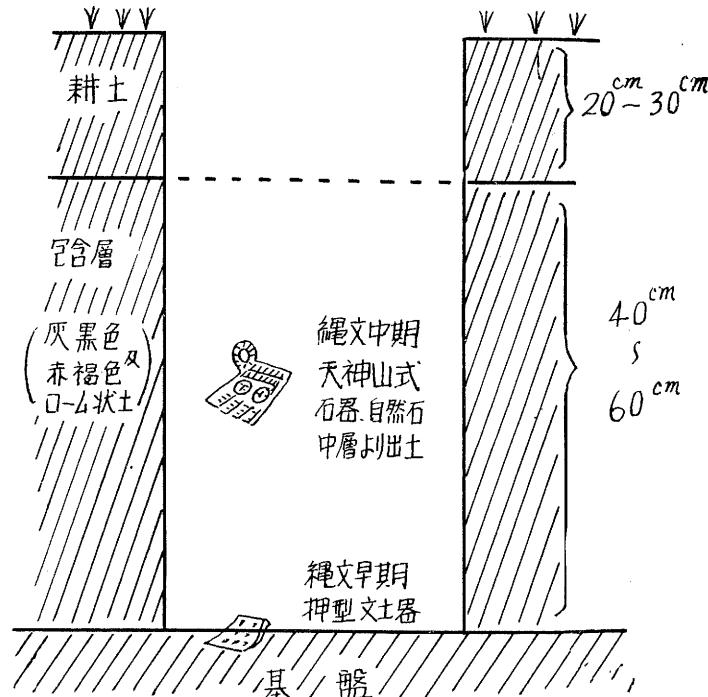
附図 2 桜峠発掘地区図



附図 3 C 地区平面図

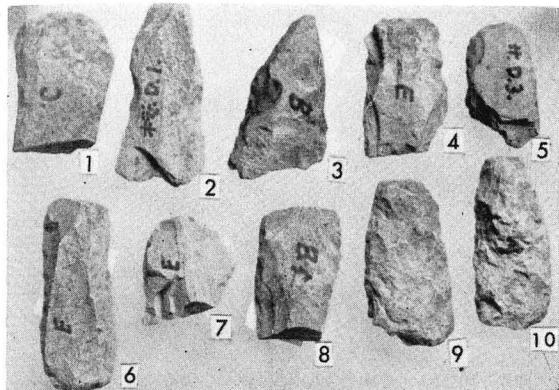


附図4 住居址平面図



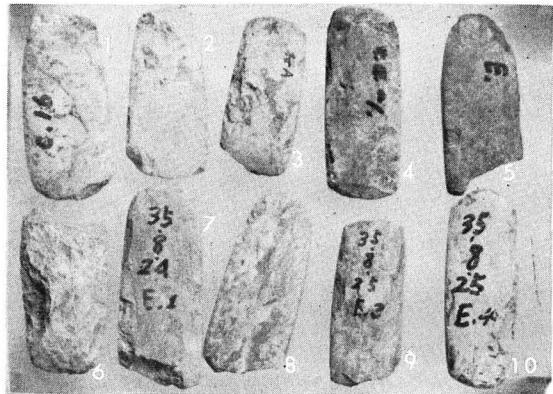
附図5 押型文土器出土地断面図 (D地区)

石 器



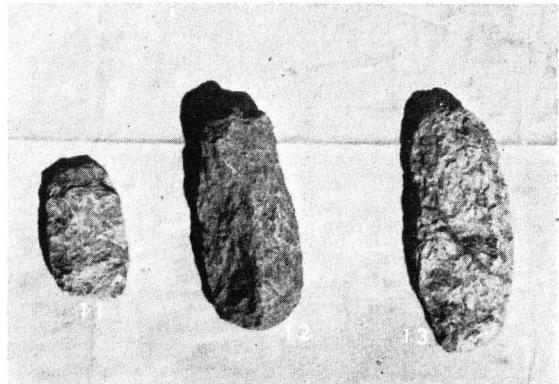
図版15

打 製 石 斧



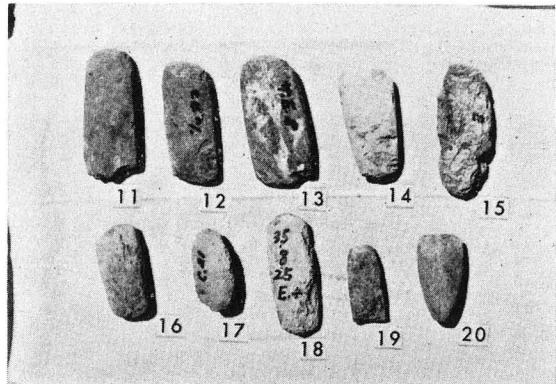
図版18

磨 製 石 斧



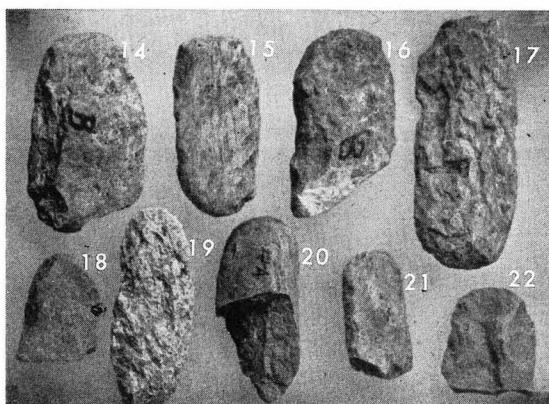
図版16

半 打 製 石 斧



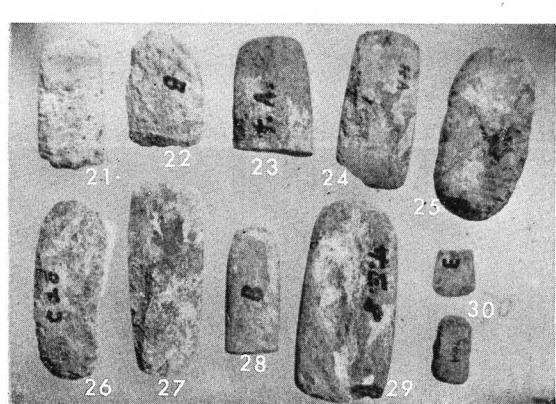
図版19

磨 製 石 斧



図版17

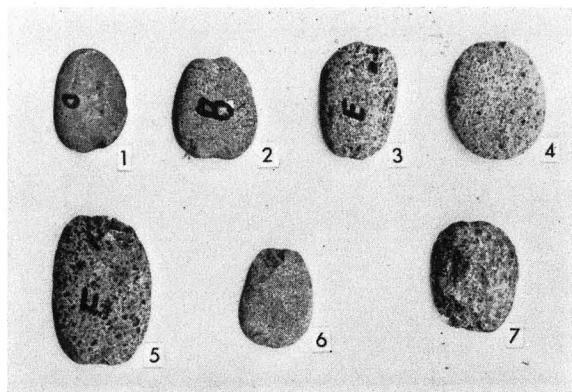
半 打 製 石 斧



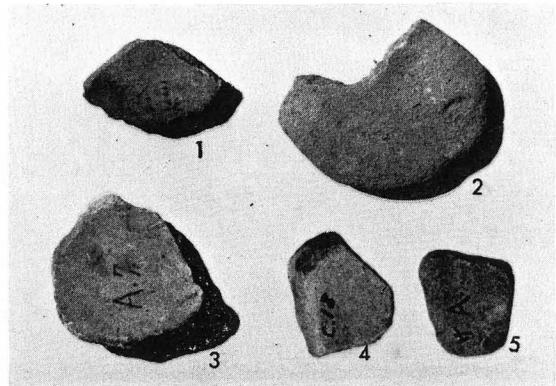
図版20

磨 製 石 斧

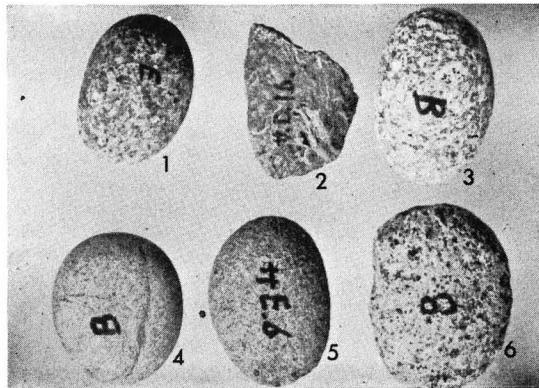
石 器



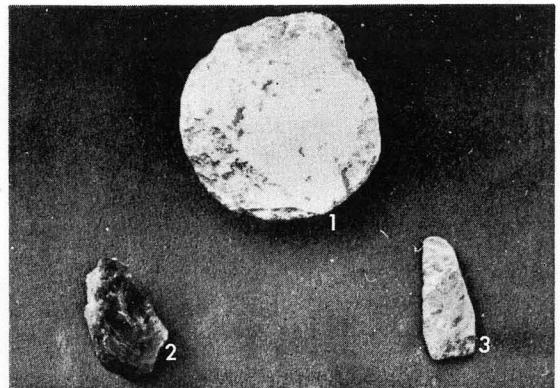
図版21 石錐



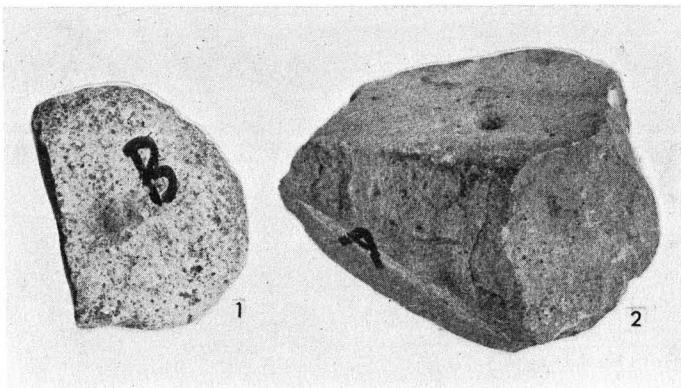
図版24 砥石



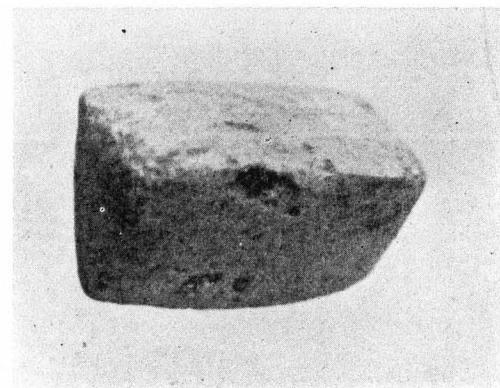
図版22 叩石



図版25 押型文土器と同地点から出土した石器

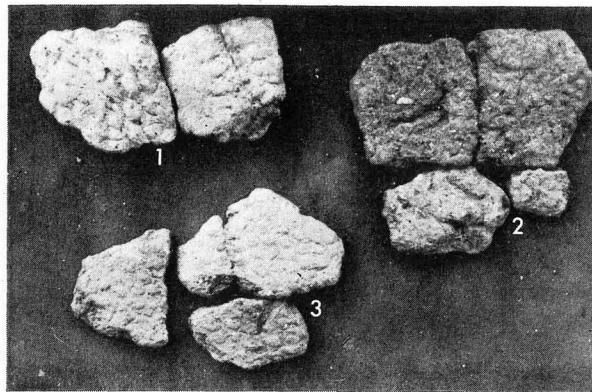


図版23 凹石



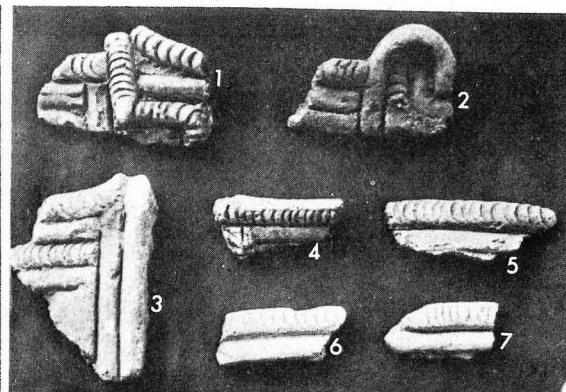
図版26 疑問石器

土 器



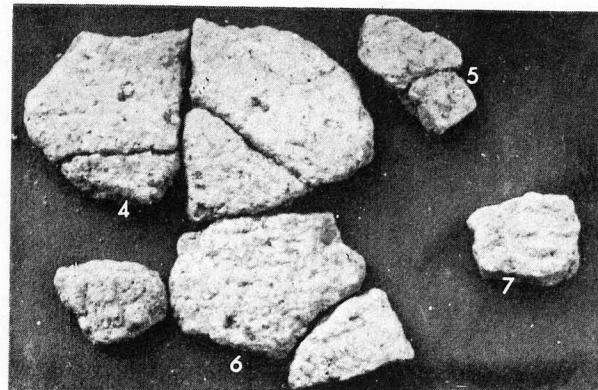
図版27

押型文土器



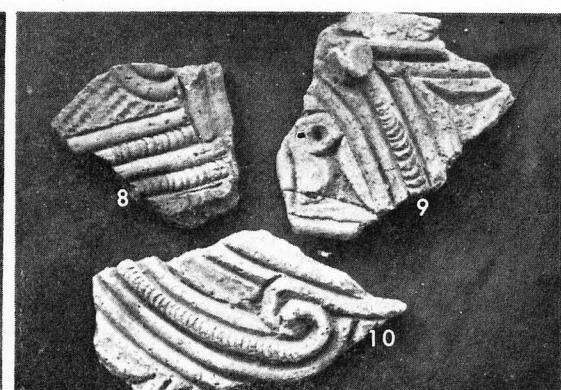
図版30

a類土器



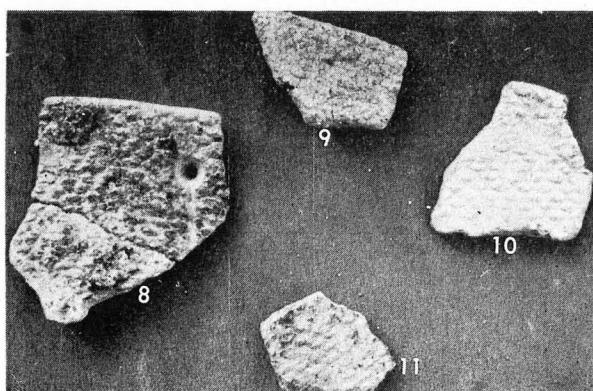
図版28

押型文土器



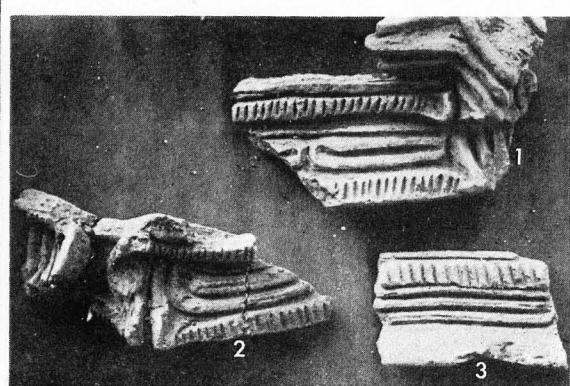
図版31

a類土器



図版29

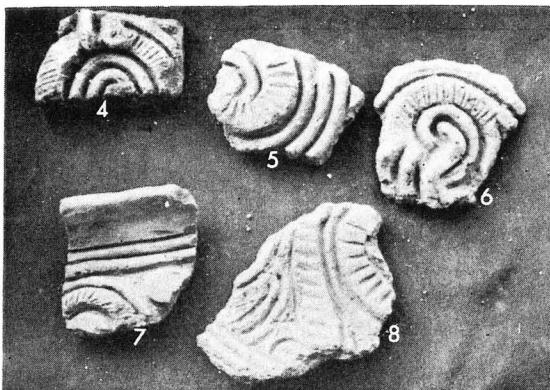
押型文土器



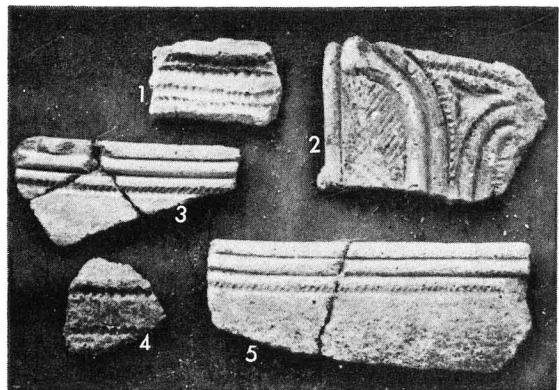
図版32

b類土器

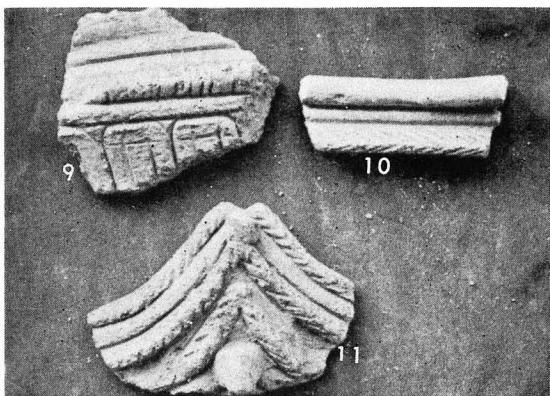
土 器



図版33 b 類 土 器



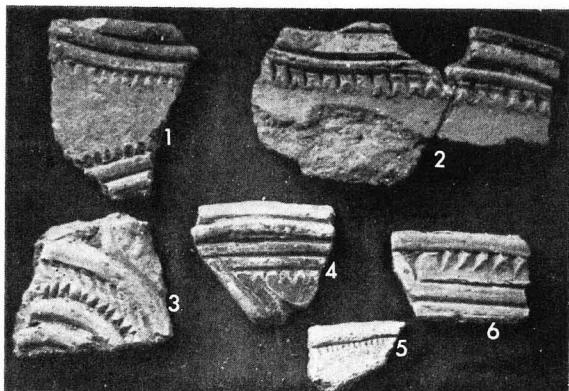
図版36 d 類 土 器



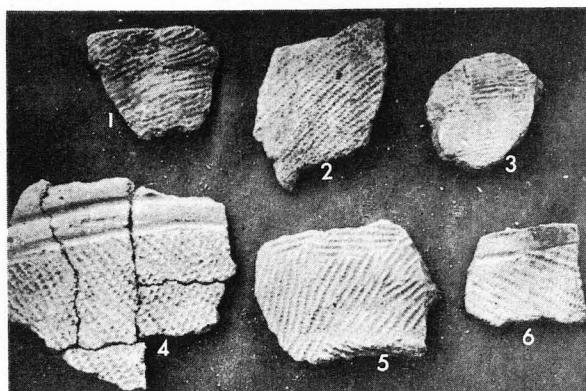
図版34 b 類 土 器



図版37 e 類 土 器

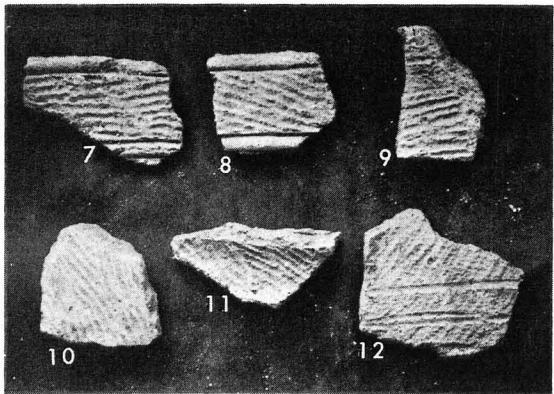


図版35 c 類 土 器



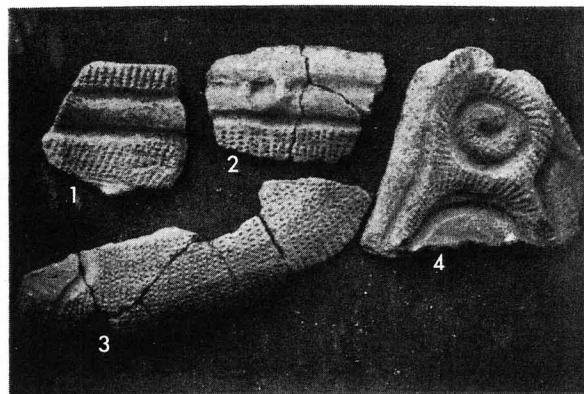
図版38 f 類 土 器

土 器



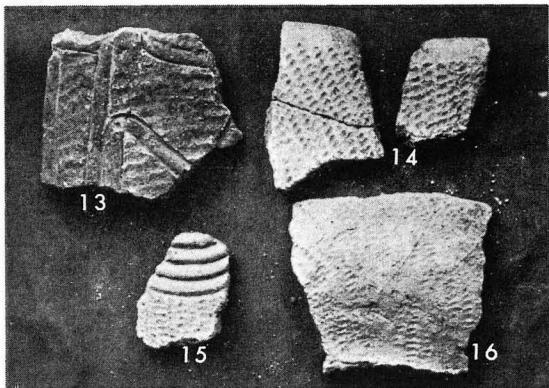
図版39

f類土器



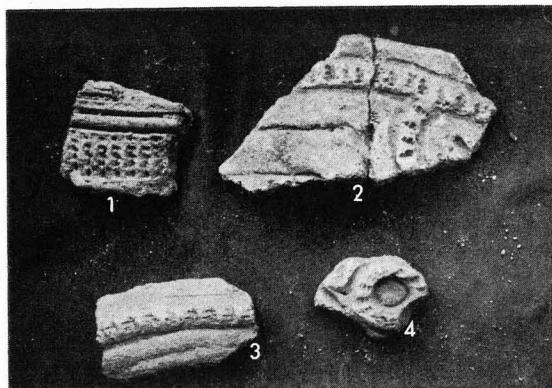
図版42

串田新式h類土器



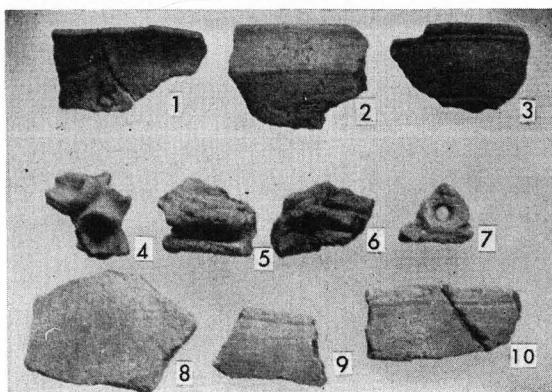
図版40

f類土器



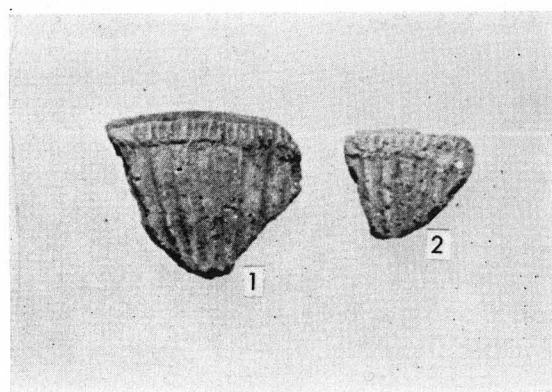
図版43

串田新式h類土器



図版41

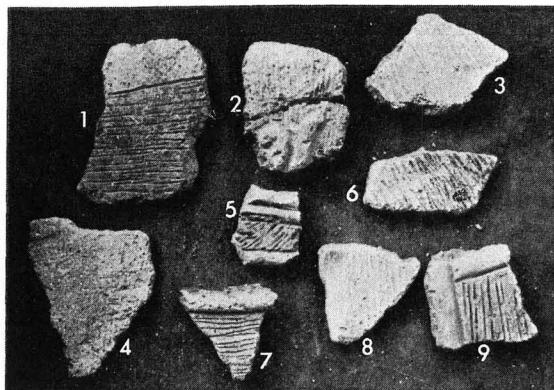
g類土器



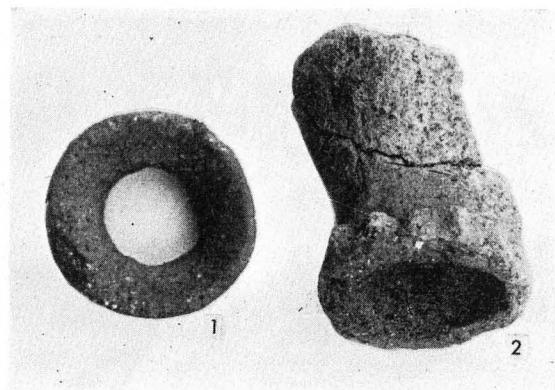
図版44

串田新式h類土器

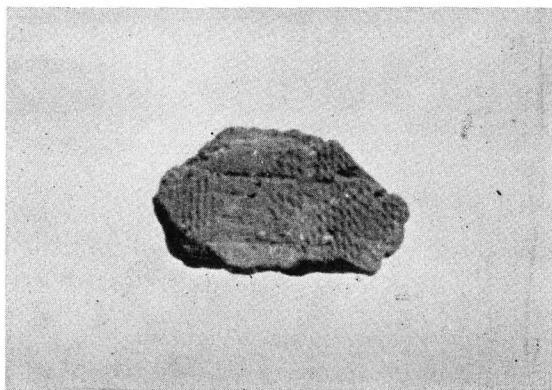
土 器



図版45 i類土器



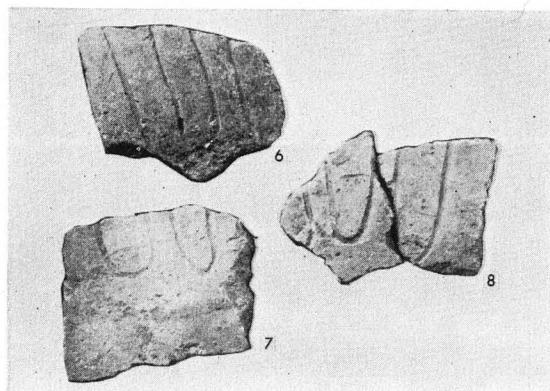
図版48 耳飾、底部



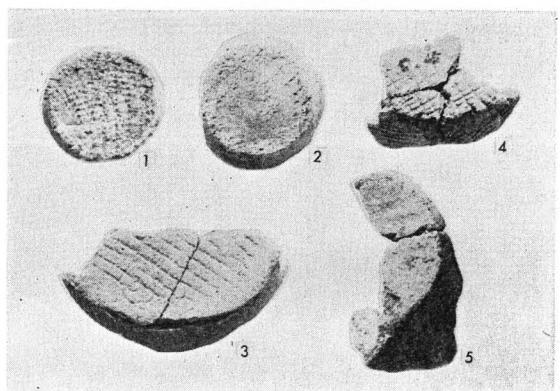
図版46 f類土器



図版49 底部



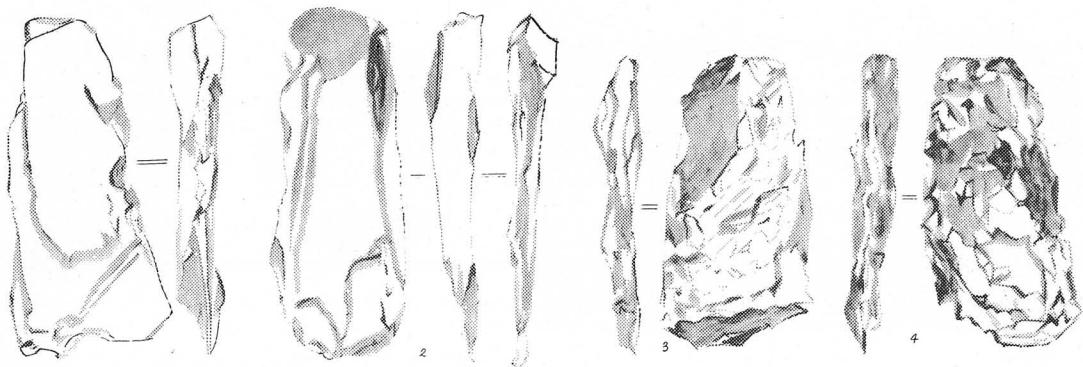
図版47 気屋式k類土器



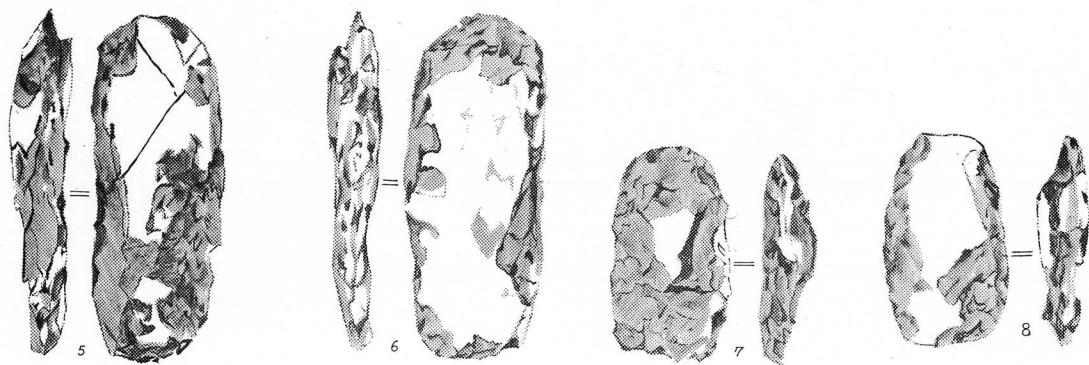
図版50 底部

実測図 1

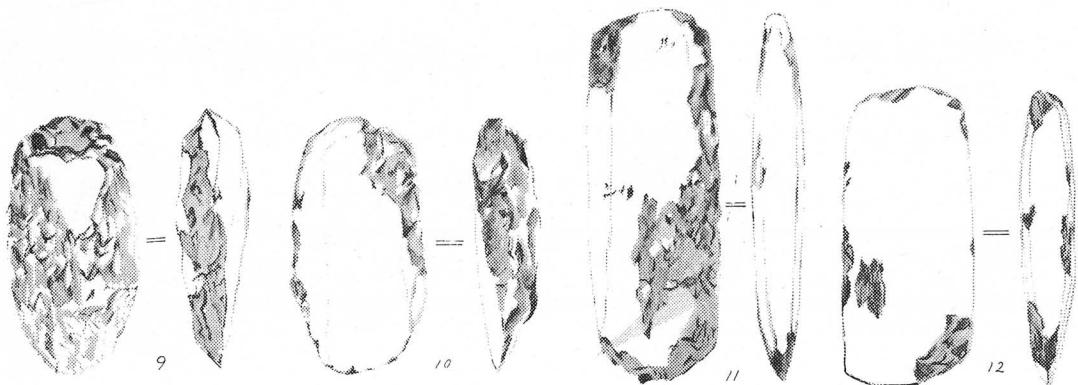
打製石斧



半打製石斧



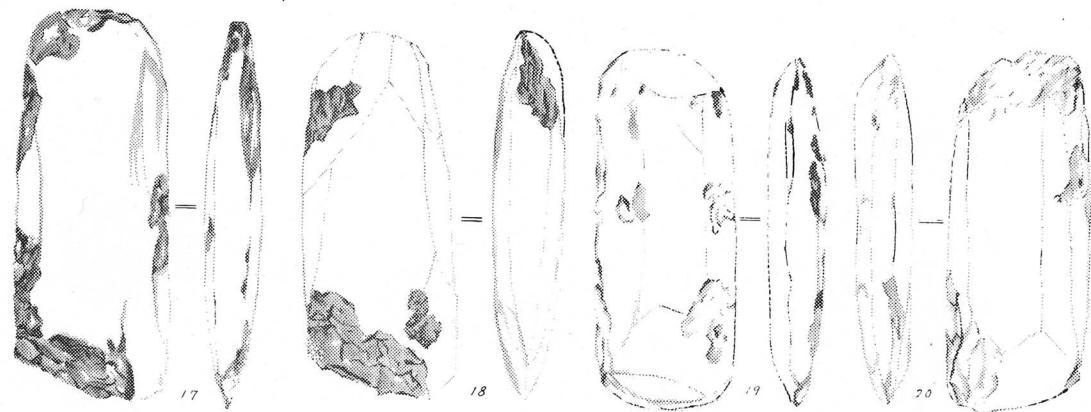
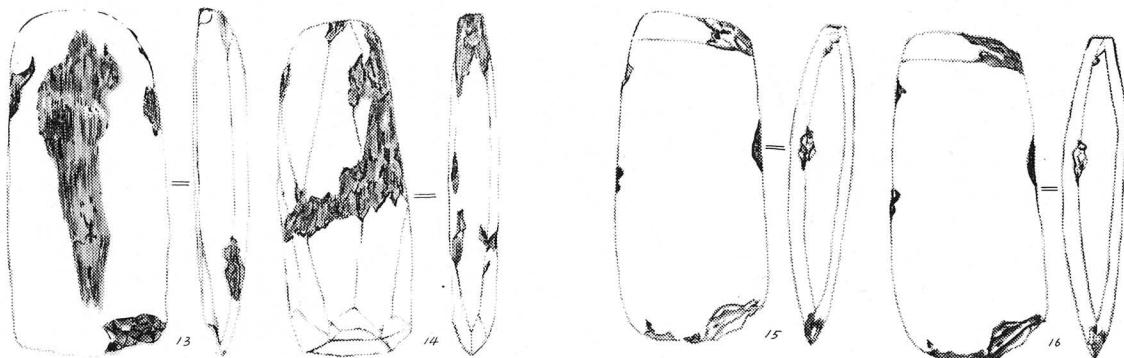
磨製石斧



縮尺 3/8

実測図 2

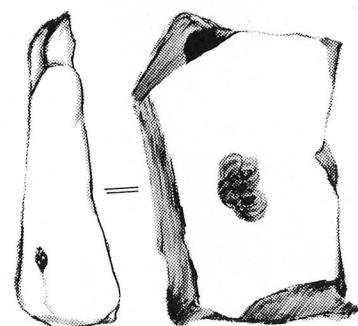
磨製石斧



石錘



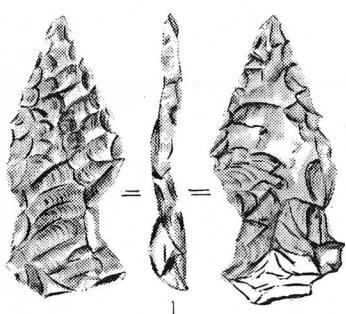
凹石



縮尺 3/8

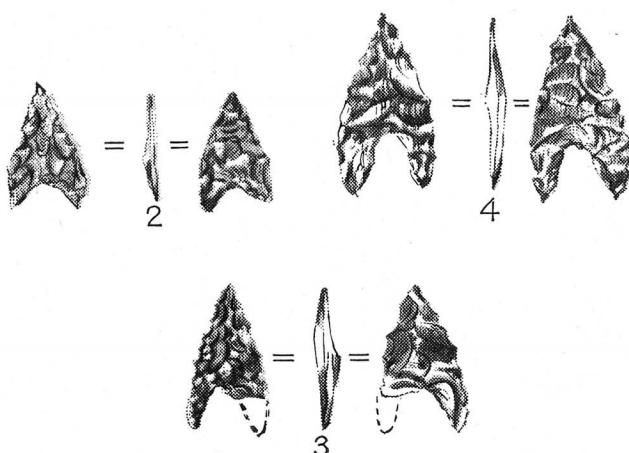
実測図 3

石 鋸



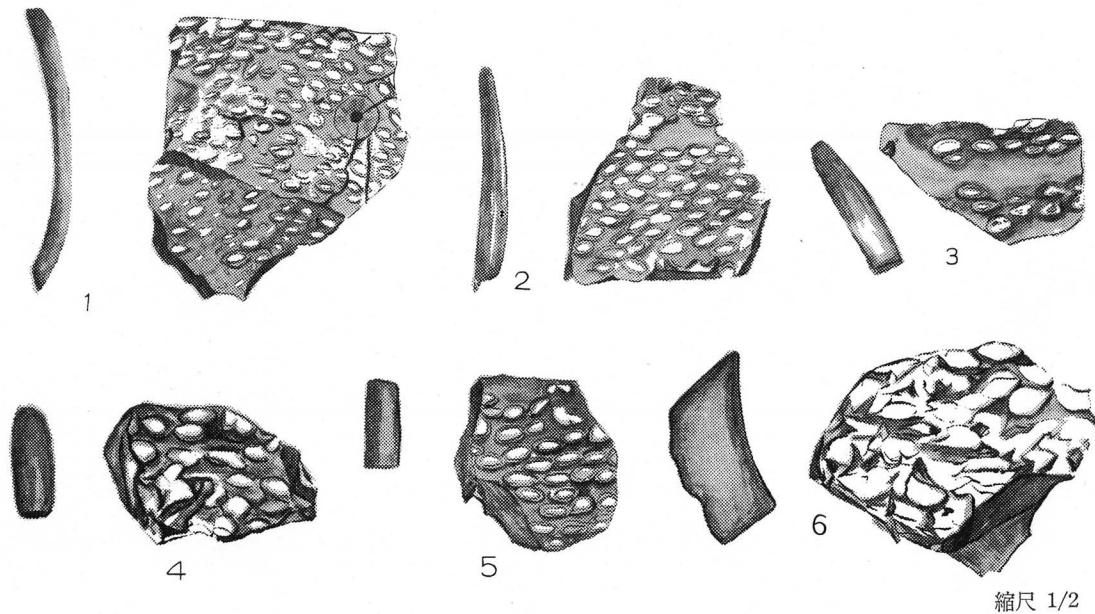
縮尺 1/2

石 鏃



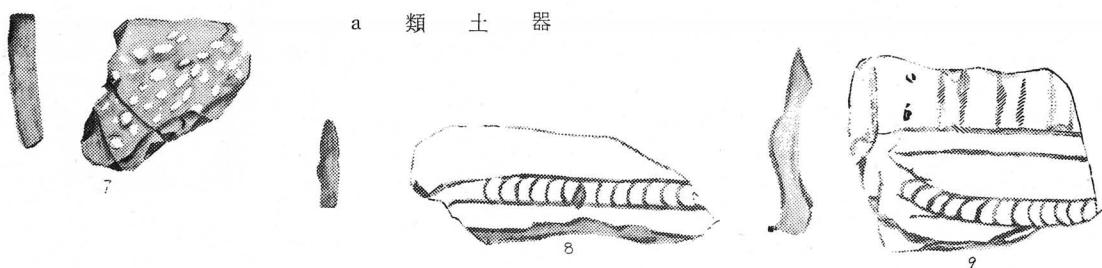
縮尺 8/11

押型文土器



縮尺 1/2

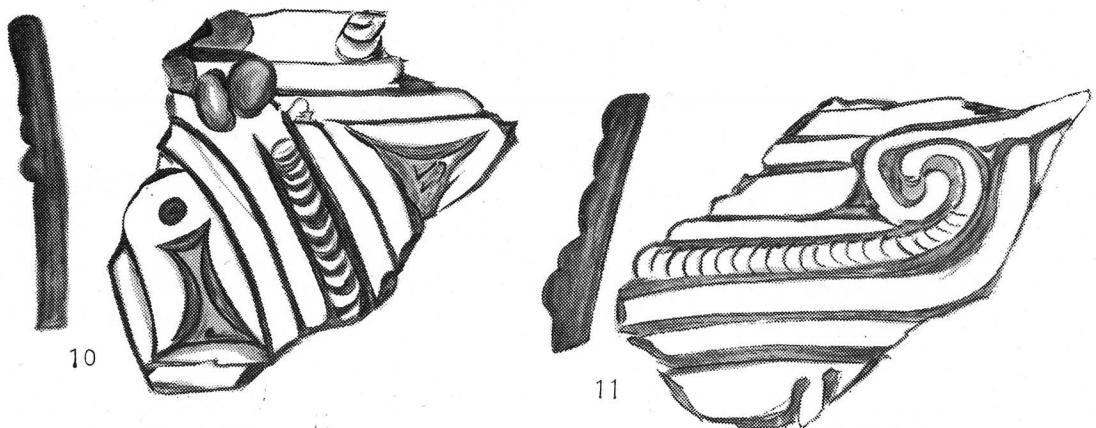
a 類 土 器



縮尺 1/2

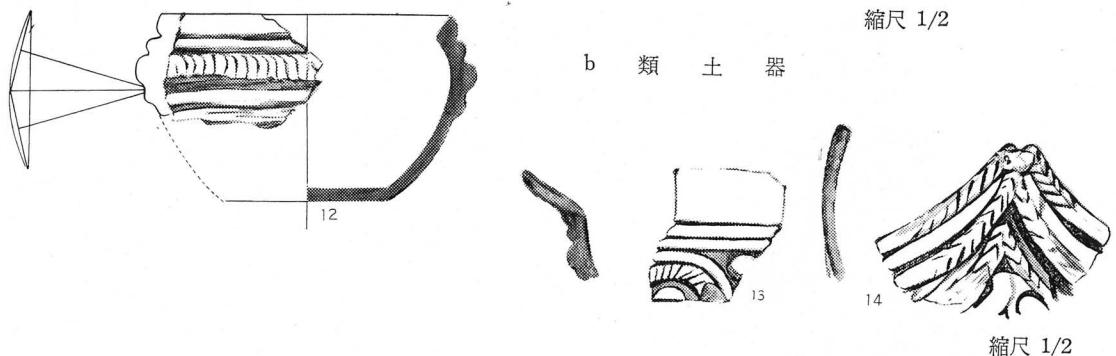
実測図 4

a 類 土 器



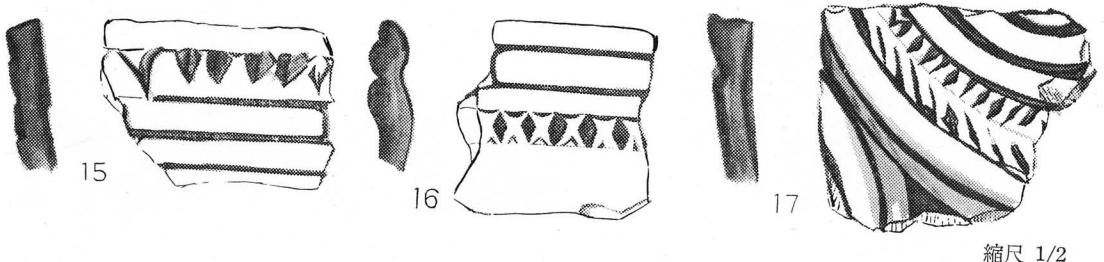
縮尺 1/2

b 類 土 器



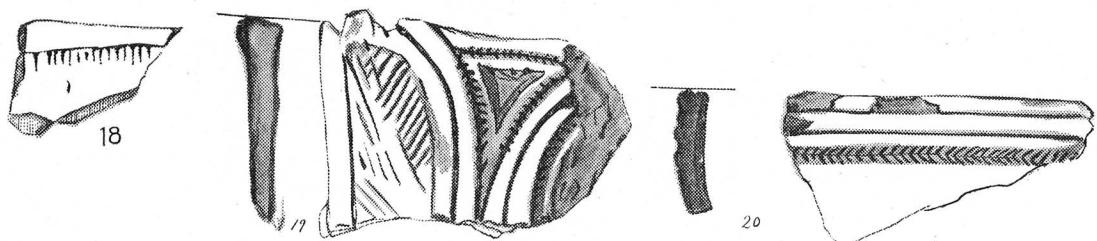
縮尺 1/2

c 類 土 器



縮尺 1/2

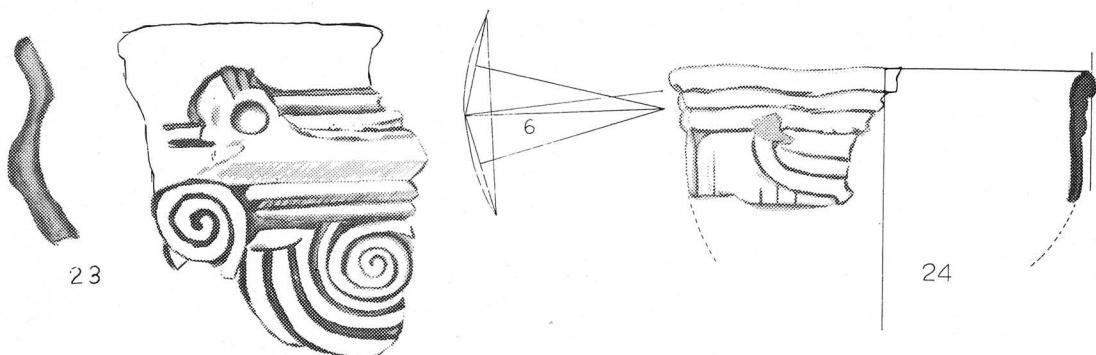
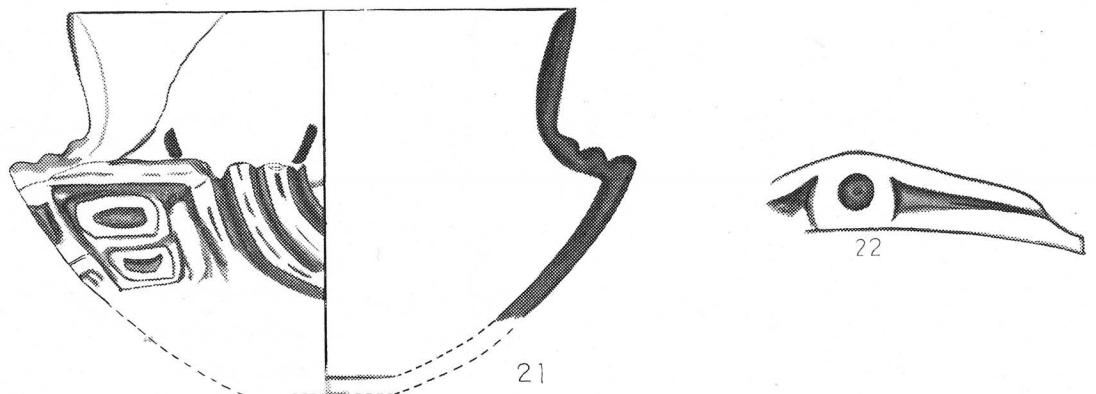
d 類 土 器



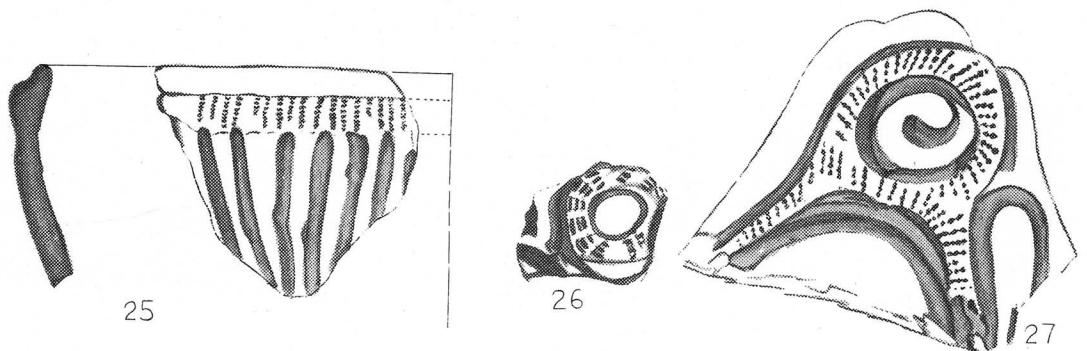
縮尺 1/2

実測図 5

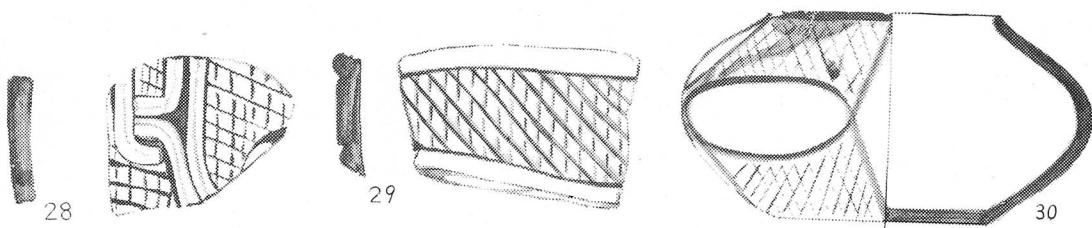
e 類土器



h 類土器



i 類土器



縮尺 1/2

実測図 6

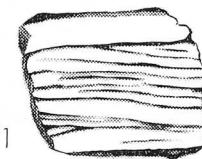
底 部

i 類 土 器

31



32

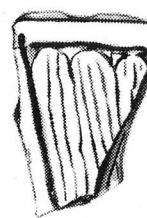


k 類 土 器

33



34



36

b 類 土 器

35

底 部

37

縮尺 1/2

昭和 36 年 3 月 20 日 印刷
昭和 36 年 3 月 25 日 発行

発行者

富山県教育委員会
魚津市教育委員会

印刷所

富山市新桜町 36
明治印刷株式会社